

---

# ヴァンパイアハンター日誌 金髪のヴァンパイア

金城 ユウ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

ヴァンパイアハンター日誌 金髪のヴァンパイア

### 【Nコード】

N7926C

### 【作者名】

金城 ヨウ

### 【あらすじ】

ニユー東京で起きた連続殺人事件。容疑者は金髪の女性。被害者の死因から、ヴァンパイアハンターの秋穂の元にも依頼が舞い込んだ。しかしこの事件が、レイの過去、秋穂の未来に大きくかわりを持つことになる。ヴァンパイアハンター日誌の第2部を開始します。とりあえず、毎週水曜日更新予定です。

## プロローグ（前書き）

いきなりエロスと血の展開ですが、この程度なら指定をかけることも無いと考えてます。（市販されているのもろエロいのあるし）抵抗あると思う方は、回れ右してお帰りになったほうがいいかも。

## プロローグ

「……あ、ん。はっ、ふう、ふあ、ああ、ああああっ……」

闇の中に、雪のような白い肢体が浮ぶ。金糸のような髪が、女の動きに合わせて揺れた。

「はう、あっ、ああっ、イイツ、ああっ、お、美味しいわっ、あなた」

男の上に乗った女の腰が跳ねる。

「た、助け、て……くれ」

男が途切れ途切れに言った。女が妖艶に目を細め、笑みを浮かべた。

「だ、駄目よ。あ、あう、私を、満足させるまで、許してあげない」  
女は男の手をとって、釣鐘型の豊満な胸に、あてがう。

「ほら、は、早く私を満足させないと、あっ、ふう、向こうで転がっている、お友達のようになるわよ」

女が金色の瞳で、男の顔を覗き込む。

「もう……勘弁、して……」

女の動きが止まった。

「そう、それじゃあ、他の事で満足させてもらおうかしら」

女は口を開いて牙を剥き、男の喉に突き立て、かみ破った。男の身体がびくんと、痙攣して鮮血が噴き出す。女は白い肌をその美しい顔を鮮血で染め、恍惚の表情を浮かべた。

「田坂警部補。病院に搬送した被害者が死亡しました」

殺人事件のあった現場に、若い刑事が飛び込んで込んできた。部屋の中には男の死体が転がっており、血臭が充満している。

「被害者は二人か。佐藤、死因は？」

「不明です。医者の話では衰弱の為ではないかと…… 詳しい事は、検死が済んでからでないかとわかりません」

田坂は、ため息をついた。

「佐藤。血の量が少ない気がしないか？傷口も牙で噛み破ったみたいだ」

「血を吸ったのですかね？もしそうなら、我々では……」

佐藤は顔を青くした、普通の人間では、Dクラスのモンスターでもかなわない。田坂は、手袋を外しながら部屋の外に出た。

「もうすぐ、ハンターが来る。それまで聞き込みだ」

田坂は、佐藤に一枚の写真を渡す。荒い画像の写真だ。おそらく防犯カメラの映像をコピーしたのだろう。

「金髪の女ですね。もしかしてこの人が」

「ああ、被害者と一緒に、部屋に入った女性だ」

「この写真から、捜すとなると骨ですね」

「それでも、捜すんだよ」

田坂は、煙草に火をつけ、紫煙をくぐらせる。

「佐藤、行くぞ。さっさとしろ」

田坂は、不機嫌そうな顔で歩き出した。

## プロローグ（後書き）

エロというほどでもありませんが、その手の描写がはいりました。  
ヴァンパイアモノはこの程度のエロスがないと（笑

後半に残酷な描写が出てくる予定ですが、ソフトな描写に落ち着く  
と思います。

そのときには前書きで警告出します。

## はじまりの風景

私は、いつものように喫茶店『リーフ』の扉を押した。扉についているベルが、カランと明るい音をたてる。

「おはよう。秋穂ちゃん。怪我の具合はどう？」

私を見たマスターが訊ねてきた。昨日までギブスを巻いて左腕を吊っていたのだが、やっと取れた。

「もう大丈夫。綺麗にながったわ。今からお客さんに会う約束。ここを指定してきたんだけど、マスター心当たりない？」

マスターは首を傾げた。

「ウチの常連で、モンスターがらみの事件に巻き込まれたという話は聞いていないな」

私は、顔見知りの常連連中を思い浮かべた。

「そうよね。私を知っている人なら、こんな回りくどい事をする必要ないし、ハンター協会からの紹介なのよ。普通、協会が受けた案件は協会で打ち合わせになるのだけど」

私はため息をついた。何か裏でもあるのかな？

「ところで、秋穂ちゃん。注文はいつものヤツでいいのかな？」

いつもの、ブレンドコーヒースナモントーストも捨てがたいけど……ふと、マスターが昨日私に言った言葉を思い出した。

「うーん、ラプサンスーチョンが入荷したって言っていたよね。という事は、今日は、キャツシュロレーヌがある？」

マスターは苦笑いした。

「秋穂ちゃんには参ったな。今、準備する」

やったあ。ちなみに『ラプサンスーチョン』は中国紅茶で、製造工程で松の煙で乾燥される。独特の燻製の香があるため好き嫌いがわかれる紅茶で、私は病み付きになった口だ。

キャツシュロレーヌは、その名の通りロレーヌ地方の料理で、タルト生地の中にベーコンとグリユールチーズを入れて焼き上げた

ものだ。これがラブサンズチョンとあう。

私の上機嫌で待っていると、カランと音がして、男性がふたり入ってきた。

一人目は五十歳くらいで、頭に白いものがちらほらと混じり、貫禄のある目つき鋭い人だ。犯罪者ではないと思う。どちらかと言っと、賞金稼ぎ（バウンティハンター）や警官などの人を追う側の人間の目だ。

二人目は、背の高い二十代半ばと思われる男性。ひよろつとしていて身長が2m弱。目が細い。見た目だけだと、悪徳商法や詐欺にひっかかるタイプの人の良さそうな感じだけど、歩いている時の身のこなしを見る限り、何かしらの武術を身につけていると思う。それが何かまではわからないけど……

私は、記憶を掘り起こしてみたが、初対面だ。話どころか顔すらあわせた事も無い。しかし、マスターは知っていたらしい。

「田坂さん、佐藤さん、いらっしやい」

マスターは、私の前にラブサンズチョンとキャッシュュロレーヌを並べながら、にこやかに迎え入れる。

マスターが名前を知っているという事は、何度か通って来ているということだろう。

二人は、カウンターではなくテーブル席に座った。そして年配の田坂という人が、私の方を見た。

「うまそうだな。マスター、そちらのお嬢さんと同じものを二つくれ」

田坂さんに続いて若い男が口を開いた。

「それから、葉月というヴァンパイアハンター来ていませんか？」

マスターは、幸せそうにキャッシュュロレーヌをパクつく私の方を、無言で指さした。

はじまりの風景（後書き）

今回は、まだ何も始まっていませんね。

なぜか、ラブサンズーチョンとキャッシュウロレーヌの説明に力がは  
いつていたりします。

べつに伏線というわけではありませんよ。たぶん私が食べたいだけ  
です（笑）

前回は、シナモントーストとブレンドコーヒーをやったんで、この  
シリーズのお約束かな（笑）

では、また来週水曜日にお会いしましょう。

## 刑事依頼

う、気まずい。テーブルの上にはラブサンスーチョンとキャッシュ  
ユロレーヌが並んでいる。

目の前に居る二人が、今回の依頼人らしいが、ハンターが私と知  
つてからは無言でラブサンスーチョンをすすっている。

確かに私は、ちんちくりんの小娘よ。高校生どころか中学生に間  
違われることもあるわよ。だけど、あらさまに困った顔する事はな  
いじゃない。そんな事を考えていると、向こうの方から口を開いた。  
「俺は、ニーストウキヨウ27分署の田坂だ。階級は警部」

「自分は、同じく27分署の佐藤孝巡查です」

二人とも警察手帳を開いて自己紹介してくれた。

「私は葉月秋保。ヴァンパイアハンターです。登録IDはV776  
H」

私も、ハンター証を提示してみせる。

ハンター証は、ハンター試験合格と一緒に発行され顔写真と登録  
IDが記されている。身分証としても使えるし、飛行機、電車、バ  
ス、タクシー等の交通機関はこれを提示すると無料になる。そして  
ハンター協会のスポンサーになっている企業の商品を5割引で購入  
できる。私用で使う人も居るが、私はよほどのことがないかぎり使  
わないようにしている。

「経歴は見せてもらった。ハンター試験合格後、実地で立て続けに  
ヴァンパイアを2体仕留めているし、その後も怪我している身でラ  
ンクCの事件を3片片付けている。今年度、いや、ここ2、3年の  
合格者で右に並ぶ者はいない」

田坂さんはラブサンスーチョンを一口飲んで続ける。

「だが、顔写真がなかったのね。こんなチャームリングなお嬢さん  
だとは思わなかった」

私はその言葉にカチンときた。まるで信用していない口ぶりだ。まあ、確かにヴァンパイアの1体は相棒であるレイの功績なのだが、腹が立つことにはかわりは無い。

私は怒りをグツとこらえ、ラプサンスーチョンのお代わりをカップに注いでから、話を切り出した。

「それで、今回の依頼は、キャンセルいたします？こちらとしては、刑事依頼は儲けが少ないので、どちらでもよろしいのですが」

刑事依頼は、モンスターの絡んだ事件に対して、警察がハンターを一時的に雇う事である。場合によっては年契約の場合もあり、モンスターを退治しても一般依頼の7割程度、長所は必要経費が全額でる事ぐらいと、警察という公的機関の評価はハンター協会の評価よりも上で、活躍できれば知名度はうなぎ上りだ。しかし、ハンターに依頼の拒否権は無い。つまり、協会から指名されたら依頼主である警察がキャンセルしない限り引き受けなければならない。

「まあまあ、葉月さんもそう尖らないで、坂田さんも、口が悪いんだから」

佐藤さんが、慌てて仲裁するが田坂さんはまったく意に介さない。「今から新しいハンターを探す時間も無いのでな。銃の腕前だけでも見せてくれないか？」

「田坂さん！」

「佐藤。俺たちは、今からこのお嬢さんに命を預ける事になるのだが、こんな書面だけで納得できるか？」

佐藤さんは黙り込んでしまった。

あう。結局この人も見た目で判断するのね。そう思うと、またふつと怒りが湧き上がってきた。

「佐藤さん…… 田坂さん……」

私は、二人を睨んだ。

「上等よ！ハンターが見た目じゃないと言う事、見せてあげる！」私の怒鳴り声で、『リーフ』にいた人間の視線が私に集まった。

刑事依頼（後書き）

怒れる秋穂ちゃんで終了でした今回、秋穂の外見について書いたのって初めてな気が（汗  
基本的に秋穂の視点ばかりだからしょうがないといえましょうがないのだけど。

次回は秋穂の大立ち回りが入る予定。敵は弱いですけどね。  
ではまた来週水曜日に。

## ゾンビはいやー

『リーフ』から出ると、右手の大通りから悲鳴が聞こえてきた。化物がどうかか、聞いた私はハンドバックからCZ-75を引き抜きながら走り出した。

大通りに出て、逃げ惑う人の波に逆らって走る。100m程走った所で10体のゾンビを遠巻きにしている人々がいた。ここまでくると野次馬根性もたいしたものだ。動きの遅いゾンビとはいえ、人間より力は強いのだ。

他のハンターも、警察もまだ到着していない。むー、現場整理してもらわないと、銃が使えないじゃない。

断っておくが、ハンターがモンスターを狩る時に、周囲の被害を考慮する必要は無い。たとえ、流れ弾で一般人が死傷しても、責任を取る必要はないのだ。多少の被害が出ても放っておくと危険なモンスターの駆除が優先される。周囲の被害を考慮するかどうかは、ハンター個人の判断に委ねられる。

Dクラスのモンスターであるゾンビは、捕まりさえしなければ危険性は少ないし、通常の武器でも脳さえ破壊すれば行動不能となる。警察の到着を待ってから、アクションを起こせば良いと判断した私の目にゾンビに押倒され必死に抵抗している中年男性の姿が映った。

反射的に身体が反応していた。男とゾンビの元に駆け寄り狙いを定めて足を振る。パンプスがゾンビの大きく開いた口にのめり込みゴキツという音と共にゾンビの頭が腐汁を撒き散らしながら宙を舞う。

きゃー、汁が服にはねたー。高かったのになあ、この服。しかし視線を下ろすともっと悲惨な目にあっている人がいた。中年男性は命こそ助かりはしたものの、ゾンビの腐汁を顔に被っている。ごめ

んね、おじさん。

後ろを見ると、佐藤さんの姿が見えた。

「佐藤さん！ほら、早くこの人を安全な場所に」

佐藤さんが、あらさまに嫌そうな顔をする。

……気持ちわかるけど、あなた警察官でしょう……

だがその行動がゾンビ達の関心を買ったようだ。残ったゾンビ達がこちらに身体を向け近づいてくる。

う、予備弾倉持っていないのに…… 怖くは無いが生理的嫌悪感  
は拭えない。汁っぽくてぐちゃぐちゃしてるし、何より腐敗臭が尋  
常ではない。

えい！と気合を入れなおし、近づいてくるゾンビ達に向かい突撃  
する。先頭のゾンビの懐に潜りこみ、喉にCZを押し当て発砲する。  
降り注ぐ腐汁。もちろん私も無事ではすまない。もうこのスーツは  
駄目かなあ。

ゾンビの動きが止まった。よし、あと8体。

ゾンビ倒すたびに歓声と拍手が起きる。いい気なものだ。私は貫  
通した弾丸が野次馬に当たる事を恐れて、距離をとっての射撃がで  
きないと言つのに…… 歓声送ってないでさっさと逃げなさいよ！  
9体目を倒した所で弾丸が切れた。ゾンビから距離をとって周囲  
を見回すが、警察も他のハンターも到着していないらしい。

何でこんなに遅いのよ。いいかげん腹が立つ。ついでに言つと佐  
藤さんと田坂さんの姿も見えない…… 警察官が何をしているのよ。

私は覚悟を決めて近づいてきたゾンビの腕と襟を掴む。ぐにゅ、  
とした嫌な弾力の無い柔らかな感触と、何か液体が滲んでくる感触  
…… 総毛立つがその感触を我慢して一本背負いで跳ね飛ばし地面  
に叩きつけたゾンビの首を踵で踏み潰す。腐汁が派手に飛び散り胴  
体から切り離されたゾンビの首が転がっていく。ビクンと数回痙攣  
してゾンビが動きを止める。

私は息を吐き出し、その場に座り込んだ。

うっ、お風呂に入りたい……

私の頭の中には、その思いだけが巡っていた。

ゾンビはいやー(後書き)

読んでいただきありがとうございます。

何故このシーンが入ったかというのと、とあるチャットで、近接戦闘(格闘戦)をしたくないモンスターは？ という話になりました。私はゾンビが一番嫌だなあ。と思ってます。ぐちゃぐちゃしてるし、臭いし、臭いし、臭いし、うじとかも沸いてるし、臭いし(笑)

来週の更新は、事情により一日早くて火曜日になると思います。)  
水曜日になったときは勘弁してください)

## 依頼受理

私は、事務所のドアを荒々しく開いた。事務所の中には、レイがいて、私の姿を認めたとたん、鼻を押さえた。

「ふあんだ、このにによいは？（なんだ、この臭いは？）」

レイは、鼻をつまんだまま、窓を開けていく。

「その路上で、ゾンビとやりあったのよ。野次馬が多くて近接戦闘になったから、肉片やら腐汁やら頭から破ったの」

私は、ゴミ袋を引っ張り出しながら、答えた。残念だが今着ている服は捨てるしかない。

「刀、そこにあっただぞ」

「ゾンビとやりあうと、わかっていたら持って行っただわよ」

ゾンビを簡単に倒す方法としては、グレネードや手榴弾で跡形も無く吹き飛ばすか。刀剣で首を跳ね飛ばせばいい。とにかく脳を破壊または身体から切りはなすか、してやればいいのだ。

「レイ。シャワー浴びている間に、刑事さんが二人来たらコーヒードでも出しておいて」

そう言った私に、レイは消臭スプレーを手にしながらか早く行けと手で合図した。

シャワーを浴びて、事務所に戻ると、田坂さんと佐藤さんが待っていた。ちょうど、レイがコーヒーを出しているところだ。

「レイ。私にもちょうだい」

レイは、「へい」と返事して奥に行く。

「秋穂さんご苦労様でした。先ほどのゾンビは、解体作業中のビルの地下から出てきたそうです。詳細は捜査中ですが…」

佐藤さんが、笑顔で言った。

戦えとは言わないが、二人が援護すらしなかった事に、腹が立ったので、状況説明すらしないで帰って来たのだが、この人……そのことに気がついていいるのだろうか？

「その件については、後は警察の仕事ですよ。それよりコーヒーを飲んだら射撃レンジに行きますから」

「いや、その必要は無い」

それまで、沈黙を守っていた田坂さんが口を開いた。

「まさか、Dクラスのモンスターとの戦闘で力量を判断したとでも……」

Dクラスのハンターなど少し身体を鍛えた人間の力量なら、らくらく合格できる。それなのに合格率が低いのは前科や素行調査で落とされるからだ。

はつきり言つて、それで力量を判断されるなど侮辱以外の何物でもない。

睨む私に、田坂さんは穏やかな声で言う。「リーフ」の時とは別人のようだ。

「いや、あなたの力量は調査の途中で見せてもらえばいい。ただ、さっきの件であんたは周りの野次馬に配慮して戦った。最近のハンターには周りの被害を考えないでバカス力発砲する連中が増えているからな。それだけでも、あんたは買いだと思った。改めて仕事を依頼したい」

田坂さんが頭を下げた。これにはびっくりした。まさか、頭を下げるとは思わなかった。

「あ、はい。内容を聞いていないので詳しくは何も言えませんが全力を尽くします」

「おまたせー。お、仕事の話？俺も混ぜてよ」

タイミングよくレイが戻ってきた。

依頼受理（後書き）

今週もお付き合いありがとうございます。

今回もそれほど進展ありません（笑

レイ君も登場したことですし、次回から本格的に始動します。

残り香（前書き）

日付が変わるまで30分ほどしかありませんねえ。ぎりぎりです（笑）  
読んでくださる方が、いかほどいるのかわかりませんが、遅れて申  
し訳ありません。

1回ほど、すっぱかしても誰も気付かないのでは？ という思いも  
しますけど……

## 残り香

「本日未明に起きた、殺人事件の現場写真だ」

田坂さんは、20枚ほどの写真を広げて見せてくれた。

私はその中から4枚ほど抜き取り、じっくり見た後にレイに渡し  
た。レイも写真を見ると頷いた。

「田坂さん、十中八九ヴァンパイアの仕業だと思います。喉を噛み  
千切られているにしては部屋の血痕が少なすぎますし、もう一人の  
被害者の衰弱死ですが、おそらく精気だけ抜き取られたのでしょう。  
部屋の状態から性交の後がありませんでしたか？」

私の問いかけに佐藤さんが答えた。

「ええ、確かにベットのシーツから、体液が検出されています」

「聞きたいのだが、ヴァンパイアが精気だけを抜き取るなんて可能  
のか？」

これは田坂さん。ベテラン刑事なのだから、これくらいの知識は  
持っていると思うのだけど……

「はい。可能です。精吸鬼とも呼びますがヴァンパイアと同種です。  
あまり世間では知られていませんでしたが、ハンター内では有名な  
話ですし最近ではテレビで紹介されていますから」

「そうか。続けてくれ」

私は他の写真をもう一度めくってみたが、興味を惹かれるものは  
無かった。

「佐藤さん、一緒に部屋に入った女性の写真はこれだけですか？」

私は金髪の女性の写った写真を手に取る。画像が荒い上に後ろ姿  
だ。これでは人物の特定は難しい。

「これだけです。後はうまく死角に入られてしまってます」

「しょうがないですね。では行きましようか」

「どこに？」

レイが怪訝そうな顔で聞いてきた。  
「もちろん現場によ」  
私は男三人を急かして事務所を出た。

現場はわりと近かった。事務所から車で十分ほど行ったラブホテルだ。部屋に入るとまだ血の臭いがした。

「……ものの見事に空ね」

警察は小さい物は根こそぎ押収したらしい。部屋にあるのはベッドやテーブルなど大型のものだけだ。掃除機までかけたらしく埃一つ落ちていない。手がかりになる物はありません。

「一応、調べてみましょう。盗撮カメラでもあったら儲けものよ」  
男達が部屋中に散る。私はバスルームを覗いてみたが、手がかりになりそうなものは無い。そこに残された香以外は……

「田坂さん、現場検証の時に女性の方いましたか？」

「いや、いなかった筈だがどうかしたのか？」

「香水の香が残っているんです。本当に微かにですけど」

だが私には確信があった。それが嗅ぎ慣れた香だったから……

「嬢ちゃんがつけているものじゃないのか？」

「私がつけているのは『センチメントSENTIMENT』というもので、このストロベリーの残り香は多分『セクシーSEXY グラフィティGRAFFITI』です」

田坂さんは信じられないと言う顔をしている。田坂さんが佐藤さんを見ると佐藤さんは首を振った。「わかりません」という事らしい。

「確かに秋穂のとは別の香がする。香水の名前まではわからないが……」

レイが、助け舟を出してくれた。

「一体、どんな鼻をしているのだから。嬢ちゃん、俺は香水の事はまったくわからん。そのセクシーグラフィティという香水の残り香で聞

「違うのか？」

「『リーフ』の秋保さんが、良くつけていますから間違いありません」

田坂さんは少しだけ考えて。

「わかった。捜査会議で報告しておこう。おい佐藤、鑑識呼んでもう一度徹底的に調べさせる」

「どうぞやら、信じて貰えたよつである。」

残り香（後書き）

今回もお付き合いありがとうございました。

秋穂ちゃん、どんな鼻をしてるんですかという話（笑）  
次回は新たな犠牲者が出ます。今回のパートの続きですね。  
ではまた来週の水曜日に。

連続事件（前書き）

前回の続きのパートです。

## 連続事件

ホテルを出てすぐに佐藤さんの携帯が鳴った。また殺人事件だそうだ。死因は失血死。何者かに血液を吸われた可能性が大。

「同一犯とは考えられませんか？」

うーん、普段ならこんな事は考えられないのだけど……ひとり人を襲えば通常1ヶ月は人を襲わないでも大丈夫なはずだ。

それに、吸血鬼は意外とハンターを怖がる。個々では能力的に劣る人間も事件が大きくなると複数のハンターを投入する。ようは質を数で埋めてしまうのだ。

そしてヴァンパイアハンターは、主人クラスのヴァンパイアでも単騎で倒してしまうほどの技量うでを持っている。

「結論は急がない方がいいでしょう。とりあえず現場に行きましよう」

現場のラブホテルには警官や鑑識の人はいたが、ハンターはまだ来てない様だ。

「お嬢さん駄目だよ。関係者以外立入禁止だ」

現場に立ち入ろうとした私に警官の声が飛んだ。いつもの事なのだが……田坂さんと佐藤さんが笑っている。そこ笑うな！

「巡查、彼女はハンターだ。見かけで判断しない方がいいぞ。秋穂さんもハンター証を見やすいところにつけてくれ」

私は、ハンター証を左胸につけた。田坂さんが名前で飛んでくれたが、気を使ってくれたのだらうなと思う。この依頼を果たしてくれた時にはちゃんと名前と呼ばせて見せると密かに誓った。

部屋に入るとベッドの上に中年男性が横たわっていた。首筋に牙の跡。だが血液の後はまったく無い。これは被害者の命や吸血鬼化

させる事を考慮しなかった時の特徴だ。吸血鬼化させるときはある程度の血液が残っていないといけない。つまりこの死体は吸血鬼やゾンビ化することはない。

「佐藤さん。ちょっといいですか？」

佐藤さんが近づいてきた所で、私はひじの内側を佐藤さんの鼻に近づけた。本来は現場に香水をつけてくるべきではないのだけど、先刻のゾンビとの戦闘で鼻が曲がる思いをした私は、愛用の香水をほんの少しだけひじの内側につけていた。

「私がつけているのとは違う甘い残り香…… わかりますか？」

佐藤さんを、死体の前に押し出す。

「あ、はい。なんとなくですが、わかります」

佐藤さんは頷いた。

「香水というのは同じ物でも、つける人やつける場所で、香りのたちが変わるのでありますがおそらく同一犯ですね。香りの印象が先ほどの現場と全く同じですもの」

「しかしよくわかりますね。最初の部屋が犯行後最低6時間。この部屋でも一緒に入った女性が部屋を出て1時間は経っていますよ」

「昔から鼻はいいのよ。料理の中の材料や調味料がわかるくらいにね」

私は現場に呼ばれた監察医と共に死体を詳しく調べてみたが、手がかりになるようなものは見つからなかった。典型的な吸血鬼による犠牲者だ。後は検死待ちだけど、有用な情報は得られそうもない。

この人に家族は、いないのだろうか？ 奥さんは？ 子供は？  
こんな所で死んだと聞かされた家族はどう思うだろう。

うーん。犠牲者の姿を見たのは初めてというわけではないが、考えなくても良いことを考えてしまう。ハンターの師匠からは「捜査中は余計なことは考えないで」と何度も言われたものだが、こればかりは直らない癖だ。

「おい、秋穂。田坂さんが、他のハンターを紹介してくれるそう  
だ」

部屋の外からレイの声が聞こえた。  
「わかった。今、行く」  
私は返事を返して部屋の外に出た。

連続事件（後書き）

お付き合いありがとうございました。

次回、物語にとってではなく、秋穂にとって重要な人が登場します。  
ではまた来週。

追伸。

できましたら感想をください。アクセス数は伸びているのですが、  
何の反応もないと心が折れそうになります。モチベーションって大  
切だなあと実感しますね。

## 師匠

外に出ると3人の男性が田坂さんの側に立っているのが見えた。  
3人共一度はTVや雑誌で見た顔である。

刑事依頼を受けるハンターは結構有名人が多い、刑事事件にかかわるとメディアの露出も増えるしイメージアップにもつながる。

彼ら元へ行こうと歩き出した瞬間、後ろから胸を鷲掴みにされた。  
「秋ちゃん、少しは大きくなったかな？」

「きゃっっ」

一瞬、パニックに陥りかけた私……ん？ この声と香水サムライの香りには覚えがある。

「舞奈さん？」

首だけ振り返ると、イタズラっぽい笑顔を浮かべた背の高い美人が立っている。

「あはは、秋ちゃん聞いたわよ、大活躍ね。私も鼻が高いわ」

つぎしままいな 月島舞奈さん。私の師匠とも言うべき人で、ヴァンパイアハンター

だった両親を失った私の後継人でもある。ちなみに私の両親は舞奈さんにとって師匠ということになる。

女性ハンターのトップ3に数えられ、美人で気取らない性格のためか一般の人気も高く、ファンクラブまである。

高校在学の3年間、この人の下でハンターとしてのいろはを叩き込まれた。この人がいなければ私はハンターとしてここに居なかったかもしれない。

「あの…… 舞奈さん、胸を離して下さい」

私は赤面しながら言った。男性陣の視線が痛い。

「あまり変わらないわね。もっと私の事務所に顔を出しなさい」と、言いつつ手を離さない。

「2週間前に『リーフ』のチーズケーキを持って遊びに行った時にも、同じ事をされましたけど……」

「まあ、いいじゃない」

舞奈さんがやつと胸から手を離してくれた。

「おい月島。弟子とじゃれてないで急いでくれ」

田坂さんが見かねたのか、大声で言った。

「はい、はい。では待ちくたびれている野郎共に、秋ちゃんを紹介しますか。さあ、行くよ」

歩き出した舞奈さんの後に、私は慌てて付いていった。

「容疑者らしい女が監視カメラに写っていました。ホテルを出たのは午前10時ですね」

自己紹介のあと、佐藤さんが写真を持ってきた。写真の中には金髪の美しい女性。

先ほど見た写真と違い、女性の顔が正面から映っている。

「午前10時だって……」ということは、星はヴァンパイアじゃないのか？ だが、昼間行動できるヴァンパイアもいるという説もあるな」

「ヴァンパイアの可能性を捨てるのは危険だと思う。秋ちゃんが先月、協会に提出した論文にもそういう事が書いてあったわね。どこからの情報なの？」

そう言っつて舞奈さんが私のほうを見た。

「前回倒したヴァンパイアからです」

心苦しくは思ったが、私は舞奈さんにウソを付いた。まさかレイがヴァンパイアで彼から情報を得たとは言えない。

「別に新しい考えではないよ。昔から言われていることだ。まあ今回の事件がそうだとしたら、その仮説が証明されることになるって話だ」

男性ハンターがそう言っつて、方針してヴァンパイアの可能性を捨てないで捜査するという事になった。担当刑事達は意外な方針に

騒然となる。

彼らの常識からすると昼間のヴァンパイア事件は無いというのが常識だからだ。まあ、私以外のハンター達も正直なところ半信半疑といったところだろう。

「秋穂、秋穂」

食い入るように写真を見ていたレイが、小声で私を呼ぶ。

「どうしたの？ 顔色悪いけど大丈夫？」

「大丈夫だ。自分で動きたいのだがいいか？」

「いいけど。どうしたの？ 本当に」

「少し気になることがあるだけだ。今日は、戻らないかもしれない」  
どうも言いたくないらしい。無理に聞くわけにもいかず、私はため息を吐いた。

「いいわ、何も聞かないであげる。でも携帯はちゃんと繋がるようにしておいてよ」

そう言っただけで現場から離れるレイを見送る。その時はまだ、写真の女性がレイの過去に深く関係するとは思ってなかった。

師匠（後書き）

きれいなお姉さん好きですか？

私は好きです（笑）

元々師匠は出演予定は無かったのですが、複数のハンターを出すということでその中の1人に設定してしまいました。（出演させるとしたら、外伝で思っていました）

やたら明るいお姉さんです。活躍できるかどうかは神のみぞ知るといったところですか。

たぶん次の次からあたりから話が動き出す予定です。（退屈でごめんなさい）

## レイとアルセクト

旧渋谷区、300年前『真紅のクリスマス』の時に日本で一番多くモンスターが現れた場所だ。

この日、各国の大都市は壊滅的打撃を受けた。

そして、復興を始めた人類だが完全にモンスター達に牛耳られた幾つかの地区が残った。日本では東京都渋谷区、港区、目黒区、千代田区、中野区、中央区、大阪府大阪市、堺市が非統制地区としてモンスターたちに占拠されたままだ。

現在では、これらの地区は壁が築かれ一般人の立入を禁じられている。

レイはその非統制区の廃墟の中を歩いていた。時折、ゾンビ等が襲い掛かってくるが難なく倒す。そしてこの時間ならアルセクトは旧渋谷駅にいるはずだ。

廃屋と化した駅のホームに無数の人影が見える。いや非統制区内だ、人間が入り込めるわけは無い。

彼らの前に銀髪の男が現れた。銀髪をオールバックにして黒のタキシードに、ご丁寧に裏地が赤い黒マントをしている。イメージ的に分かりやすいヴァンパイアだ。

「昨夜、小林がやられた。その周辺から探せ。見つけたら連絡しろ、お前たちでは勝てぬ。散れ！」

人影が一瞬で消えた。アルセクトはその場を動かない。

「レイか？」

アルセクトが振り返る。柱の影からレイが姿を現す。

「お前も、ヤツを、カミラを追っているのか？」

レイの問いにアルセクトが答える。

「今回は協力せぬ。美月の仇は…… 私が取る！」

「それはこっちのセリフだ。カミラは俺が倒す！」

「ふっ、相変わらずだな。だが、私とて美月の仇をみすみす渡すわけにはいかぬよ」

レイは踵を返した。

「レイ、カミラの事を知らせて来てくれたのか？」

「いや、協力できないかと思ったただけだ。無理とはわかっていた。気にするな」

レイはそのまま闇に消える。

「レイ…… すまぬな。だが200年待ったのだ。美月、お前の仇は取る」

廃墟と化したビルの屋上、レイはやたらと赤い月を見ていた。

しかし、その瞳は月を見ているわけではなく。

「美月…… 俺やアルセクトのやろうとしている事を知ったら、君は怒るのだろうな…… でも、このままでは俺もアルセクトも前には進めない」

レイは立ち上がり再度、紅月を見上げた。

「カミラ…… お前は必ずこの手で」

レイとアルセクト（後書き）

今回はちょっと短いですが。でも次回からやっとストーリーが動き出しますよ（笑）

どんな銃火器を登場させようか楽しみだったりします。  
ではまた来週。

## 非統制地区

21時、私は事務所に戻ってきた。捜査に協力しているハンター16人の内、半分は10時間の休息時間だ。これはマニュアルにハンター及び捜査員は24時間の内8時間の睡眠が義務つけられているからである。

奥の部屋を覗いてみたが、レイは一度も帰っていないようだ。綺麗に片付けられていた。昼間、顔色が悪かったのも気になる。

事件はレイと同じ原種と呼ばれる吸血鬼の仕業だと私は確信しているが、現在の所、人間側はその存在を認めてはいない。先月、協会に提出した私のレポートも会報に掲載はされたが反応は鈍い。

「ふう」

ため息をついた私は昼間にゾンビ退治に使った銃、CZ75を手に取り分解を始める。時間は21時30分、少し時間的余裕がある。昼ゾンビの体液塗れたいえきまみになった愛銃を私は少しずつ分解していった。

「にゅ……」

携帯の着信音に叩き起こされた。テーブルの上には分解されたCZがならべられていた。分解した後にそのまま寝てしまったらしい。時間は0時24分。

この音は昼間に新しく登録した緊急呼び出しコール。着信音が消え自動読み上げ機能が届いたメールが読み上げられる。

『各捜査員、ハンターは、非統制地区・千代田区に急行されたし』  
緊急呼び出しとは穏やかでない。私はロッカーから電気信号によって伸縮する布で作られた黒い戦闘服を取り出し身につけた。その上にコートを羽織る。戦闘服にはパワーアシスト機能もついていて、

乗用車くらいならひっくり返す事も簡単に出来る。

そして、幾つかの装備と予備弾倉をバックの中に放り込む。

私が事務所の前の大通りに飛び出すと同時に、目の前に覆面パトカーが止まった。佐藤さんと田坂さんだ。私はそのまま後部座席に乗り込んだ。

「状況は？」

私の問いに坂田さんが答えた。

「月島班と朝霞班あさかが容疑者を発見。だが、容疑者は非統制区の壁を飛び越え内部に逃走。その際、ハンターの朝霞氏と捜査員の神谷が軽傷をおった。10分ほど前のことだ」

「それで、どうするの？」

「中に入って狩り出す」

そんな無茶な、非統制区の中はゾンビやワーウルフが普段から徘徊している。しかも、今夜はモンスターたちが一番凶暴化する満月。非統制区に入るには最悪な条件だ。

「作戦を変更させてください！」

田坂さんが首を振った。

「今、現場にいるハンター達の了解は取ったそうだ。ハンター達の助手に我々も加わる」

いくら警官とはいえ、素人を非統制区の中にだなんて……

「ひとつ聞いてもよろしいですか？ 対ヴァンパイアのレクチャーはうけたことありますか？ あと、戦闘訓練も？」

「レクチャーは受けた。戦闘訓練はないな」

「他の捜査官は？」

「みんな、似たようなものだろう」

私は思わず頭を抱えた。

非統制地区（後書き）

今週もこんばんは（笑

仕事が無事更新できました。更新日を決めていない作品の更新は止まってしまってますが（汗

容疑者発見の報から、舞台は非統制地区内に移行ですよ。秋穂ちゃんも頭を抱えてしまってますけどね。

今週の更新分で秋穂の愛銃のCZ75が分解されたままなので、来週の更新分で新たな銃火器が登場予定です。さてどのような銃火器が登場しますか。

来週は第1話に登場したあの人も再登場です。

## 作戦前

「作戦を、中止してください！」

私はバンと机を両手で叩きながら、警視に詰め寄った。

「ふん、気に入らないなら作戦に加わらなくてもいいが、どうするかね。葉月君」

「非統制区に入る事に反対していません。モンスター達に対する訓練どころか、ろくなレクチャーすら受けてない捜査官達を非統制区に、ろくな装備を持たさずに入れる事に反対しているのです」

警視は目線を私から外した。私の言うことについて何か思うところもあつたのだろう。頭ごなしに否定はしなかった。

「いいかげんにしないか！」

怒鳴り声を上げて席を立ったのは、同じハンターだった。

「捜査官の同行は上が決めた事だ。ごたごた言わずにしたがえばいい。それに、このことについて反対しているのは君だけだ。他のハンターは了承している」

確かに、彼らに自分の身は自分で守れと突き放してしまえばよいのだろう。責任は彼らの上司にありハンターには無い。

私はため息をついて下を見る。初めから作戦の変更が無いのはわかっていた。ただ言わずにはいられなかった。無駄に犠牲者を出したくは無かったから……。

「……わかりました。作戦を了承します」

警視の顔に喜色が浮ぶ。

「そうか、そうか。では各人、準備をしてくれ。作戦開始は15分後だ。では解散」

臨時の会議室から、皆が出て行く。

「秋ちゃん」

師匠である舞奈<sup>まひな</sup>さんが声を掛けてきた。

「大丈夫です。いくらなんでも自分の意見がすべて通るとは思っ

いません…… あたえられた状況下で全力を尽くす。舞奈さんに叩き込まれたことですから」

「そう、ならいいわ。それじゃ先に行くね」

「ありがとうございます」

私は舞奈さんの背中を見送る。

「田坂さん、佐藤さん、ちょっとついてきてくれませんか？」

私は2人を外に連れ出した。

2人を連れて外に出ると、タコ坊主、いや『斬』の店長が立っていた。夜だというのにサングラスはつけたままだ。

「よう、秋穂ちゃん。ご注文の品を持ってきたぜ」

そう言つて1BOX車の後部座席を開いた。フラットにされたそこにはP90という軍用短機関銃が4丁並んでいた。

P90は人間工学に基づく、従来にない斬新なデザインをしていることが特徴で、反動も少なく比較的扱いやすい機関銃だ。

「ベルギーのFN社製、軍用短機関銃4丁と50発入り通常弾倉40本。それに、対ヴァンパイア用の特殊弾頭入りの弾倉12本。今あるだけの在庫をもってきた。ただ、FN Five-seven<sup>ファイブセブン</sup>は在庫が無かった。いやー急にメールで、注文がきたんでビックリしたぜ」

Five-seven<sup>セブン</sup>はP90のサイドアームとして開発された拳銃だ。弾丸はP90と同じものを使用する。けれど無いものを強<sup>ね</sup>請<sup>だ</sup>つてもしょうがない。

「それはこつちでどうにかするわ。悪いのだけど支払いはこれをお願い」

私はハンター証を差し出した。

「秋穂ちゃん、ウチはいつもニコニコ現金払いが原則。帰ってきてからでいいから」

「でも、正直なにおおき……」

店長の指が私の唇に触れた。

「怪我しないで帰ってきて、現金で払いにきてくれよな」

店長の指が私の唇から離れた。うわ、店長キザすぎ…… でも、

そう言ってくれる事には感謝する。

「店長かっこつけすぎ」

「そっかい？」

店長はいつものように白い歯を見せてニカッと笑った。

でも、商人としては失格かも……

作戦前（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます。

動く動くといった割には、まだ入り口でウロウロしている始末……

ごめんなさい。

次の更新時には突入していませんねこのペースでは。

次回がこの続きで、その次にレイとカミラ視点の回が入りますので、非統制区内の話に入るのは、年明け（2日）になりそうな予感（汗今年最後の更新で2話更新するんも良いかも）。

## 装備

「田坂さん、佐藤さん、受け取って」

私は、二人にP90を差し出した。

「お、おい、嬢ちゃん。これは一体……」

いきなりのことに田坂さんも佐藤さんも困惑気味だ。

「田坂さんがそのニューナンブ1丁で、非統制区に入りたくないなら止めないですけど、少しでも身の安全を計りたいのなら、私の権限で貸与します。使い方は…… 店長、教えてあげて」

普通なら警官といえこんな強力な装備を持つことが出来ない。モンスターが跳梁跋扈するこんな時代でさえ銃刀法で銃の携帯は規制されている。しかし、その例外がモンスターを狩るハンターであり、その権限の中にはハンター以外の人間に対しての銃の貸与も含まれている。

私は自分のP90に弾倉を差し込み、ポケットに入りきらなかった予備弾倉をガムテープで身体に固定する。

「それから、これを持って行って銀の弾丸が装填されているから」  
グロッグ26を2丁差し出す。グロッグシリーズの中で最もコンパクトなモデルで、樹脂製フレームの圧倒的な軽量さ、手のひらに収まるほどの大きさで、足首に巻いて隠すことも可能だ。弾薬も9mmパラベラムを使用、装弾数も10+1発とこのサイズでは最大だ。

コンシールドキャリアピストル（隠し持つ銃）と呼ばれるとおり、携帯性を優先して選択した。

「最低限、自分の身は自分で守ってください。皆、容疑者が昼間行動している事から吸血鬼という可能性を捨てているみたいですから

……」

「秋穂さんは、捨ててないのですか？」

佐藤さんが聞き返してきた。

「依頼を持つてくる時に、私の事を調べませんでした？ハンター協会に提出したレポートの通りです。それに吸血鬼でないにしても、10メートルもある非統制地区外壁を飛び越える相手ですよ」

少なくとも、吸血鬼並みの身体能力だ。これを相手にするならばヴァンパイア戦を想定した準備が必要だろう。それに非統制地区の中での作戦なのだから、他のヴァンパイアとはちあわせという可能性もある。その辺に可能性は他の人たちもしているようだが。

「秋穂さんは、原種と言うヤツの仕業だと？」

「信じるも信じないも勝手ですけど、私はそうだと確信しています」  
田坂さんと佐藤さんは顔を見合わせた。

「なあ、佐藤。どう思う？」

「田坂さんは？」

「ん、俺か？」

田坂さんは煙草に火をつけて、思い切り吸い込んだ紫煙を吐き出した。

「嬢ちゃんを信じるさ。仕事を依頼した以上、それが大前提だ」

2人はそそくさとP90を手にとって使い方を教えてもらっている。

それを横目に見ながら、私はシグP239にハンターショップ『斬』特製の対ヴァンパイア用試作弾丸を込める。本当なら愛用のCZ75を使いたいが今は分解中だ。

「開始時間まで後5分。田坂さん佐藤さん、準備はいいかしら？」

二人に声をかけた私の姿は、異様なものに映っただろう。両手にP90を持ち、体中にP90やP239の予備弾倉を貼り付け、刀まで装備している。

「……秋穂さん、戦争でもするつもりですか？」

「戦争で済まないかもよ…… さあ、行きましようか？」  
長い夜が始まった。

装備（後書き）

今回もどうにか水曜日中に更新できました（笑  
来週は無事更新できるだろうか。

今回の秋穂のメインウェポンはFN P90とSIG P239を  
チョイス。

気が付いた方いましたでしょうか？

GUNSLINGER GIRLのヘンリエッタの装備です。まあ、  
特に深い意味は無いのですが（笑  
それではまた次回の更新で。

行間 (仮タイトル) (前書き)

毎週水曜日の更新ですが、イレギュラーで更新。  
ストーリー的にノロノロしているので、年内に非統制地区の話しに  
もって行きたいなと思ったので更新しました。次回はちゃんと水曜  
日(今年最後の更新かな)に更新します。

サブタイトルは仮です。いいものが浮かばなかったので(笑)

行間 (仮タイトル)

夜空には、血に染まったような赤い月が浮いている。レイは廃墟となったビルの上で何をしてもなく、月を見上げていた。

その時、妙に軽快な音楽が流れた。今、中高生に人気のあるアーティストの曲だがこの場の雰囲気にはそぐわない。ちなみに選曲は秋穂だ。変更するのも面倒なのでそのままにしてある。

レイは秋穂に無理遣り持たされた携帯電話を懐か取り出す。秋穂からのメールが一通届いていた。

『非統制区の千代田区で容疑者を追っ』

状況の説明も何も無い、簡潔な文章が緊急性の高い事をしめしている。

「こんな満月の日に非統制区に……」

レイは絶句した。満月の夜には人間社会ですら凶悪犯罪が増えるそれが、吸血鬼や人狼等の闇に生きるもの達なら尚更だ。凶暴化し能力も普段より上がる。それがわからないはずはないのだが……

レイは携帯を懐に戻すと、ビルから飛び降りた。

「あは、楽しみねえ。自分たちが強いと思っている人達の自信を叩き壊すのは」

金糸のような髪をなびかせて、廃墟と化したビルの上から女が楽しそうに言った。

「カミラ様、準備は整っています」

カミラと呼ばれた女性の後ろに4人の男が現れた。全員目が赤い、ヴァンパイアだ。

「そう、ありがとう。ところで不死を手に入れた気分はどう？」

「素晴らしい。この力、人間などクズですな。我々はあなたに永遠の忠誠を誓います」

カミラは上機嫌だ。

「ふふふ、あはは。それはよかったわ。でも、私を裏切ったらあなた達は虫けらのように狩られるのよ。心に留めて置いてね」

「はい、すべてはカミラ様の為に」

「それじゃ、貴方の血を貰おうかしら」

カミラは男の顎を上に向けると、その首元に大きな犬歯で噛み破る。男の身体がビクンと痙攣して血液が断続的に噴き出し、カミラの白い肌を赤く染める。カミラは、身体を震わせて嬉しそうに笑った。

「ほら、気持ちいいでしょう」

血を吸われた男が頷く。

「さあ、行ってきなさい。全員、狩る事が出来たら、また快樂をあげる」

「アルセクト」

レイがアルセクトの背後に現れた。二人は非統制地区の外壁の上立っている。

「レイか、早かったな。あのハンターのお嬢さんからの情報か？」

「お前こそカミラを追わなくていいのか？」

「ハンター連中が多くてな。カミラとやり合っている時に背中から撃たれたくない。少し数が減るのを待たせ」

アルセクトがおもしろくなさそうに笑う。

「ハンターのお嬢さんを助けたかったら急ぐ事だ。今回は手助けはしないと云ったはずだぞ」

「秋穂なら大丈夫さ。カミラと出くわさなければな。だが、先に行かせてもらうぞ。カミラを狩るのは早い者勝ちだ。いいな」

「ふん、好きにする」  
アルセクトは無然とした表情で言った。

行間 (仮タイトル) (後書き)

秋穂にレイ、アルセクトとカミラ。今回の話で、役者が同じ舞台に立ちましたね。

これで物語が加速することを祈ろう(笑)

なにせ、プロットは書くもののキャラ任せの行き当たりばったりで書くもので、自分でもどう進むかわかりません(笑)

また試作品？

月光の下、廃墟と化した町の車道でゾンビが蠢いている。先ほどまでまったく姿を見せなかったゾンビたちが、崩れかけたビルの分厚いドアに群がっている。

「佐藤さん、他の班に連絡つかないの？」

通信機で連絡を取ろうとしていた佐藤さんは、手の平を上に向けて肩を竦めた、古臭いジェスチャーをする人だ。

「通信機も携帯電話も繋がりませんね。このあたりなら中継アンテナの範囲内なのですが」

突然、主人クラスの吸血鬼や人狼達の襲撃を受けてから30分経っている。私にしても佐藤さんと田坂さんを守るだけで、いっぱいはいだった。そんなわけで、他の班とは完全に分断されたようだ。

「完全にしてやられたな。お嬢ちゃんすまないな、足引っ張ってしまつてよ」

田坂さんが自嘲めいた笑みを浮かべた。

「充分予想できた事態ですし、そのためのP90ですよ。でも今は撤退の一手しかないですね」

非統制区の入入りである東西南北の門にたどり着く事が出来れば田坂さんと佐藤さんの安全を計れる。

「私が血路を開きますので、西口に向かいましょう」

「西口ですか？ ここからだ、北口の方が近くないですか？」

確かに西口よりは北口の方が近いし、西口に行くには先ほど襲撃を受けたポイントを、通らなければならぬ。

「佐藤！ 作戦前、お嬢ちゃんを信じると言ったとおりだ」

「田坂さん、気を使わなくてもいいわよ。佐藤さん、確かに北口の方が近いけど向こうには、なにもないのよ。武器弾薬の補給も出来

ないし、他の班の情報も入らない。でも、西口には本部があるから、少しくらい危険を冒す価値はあると思うの」

私は残弾をチェックしながら答えた。

「秋穂さん、西口に戻ってからまた引き返すつもりですか？」

「2人を送り届けてから、皆と合流を試みるわ。まさか1人で紅茶を飲んで高みの見物という訳にはいかないでしょ？」

P90、シグP239の残弾もOK。バックアップのダブルデリンジャーもOK。日本刀とナイフに刃こぼれもなし。そして、『斬』の店長から貰った手榴弾が2個。確か、試供品だと言っていたわね。どこのメーカーが手榴弾の試供品なんか…… とりあえず、ちゃんと使えるわよね？」

「秋穂さん、考え直してくださいよ。1人で引き返すなんて無茶ですよ」

「佐藤さん、貴方が犯人を追っていて素人しやうじんに「犯人が、拳銃を持っているから、追跡をやめなさい」と言われたら、犯人を追うのをやめる？ それと一緒によ。この場では私がプロで佐藤さん達が素人なの。やらなきゃいけないことはやるわよ」

正直に言うと、他のハンターたちのことは心配していない。私より経験も実力もある人たちだ。自分でどうにかするだろう。

問題はそんな彼等が、捜査員の人たちを足手まといと切り捨てた場合だ。最悪の場合、置き去りにするだろう。でも私はそんなのは嫌だ。

そんな考えは口にも表情にも出さず、私は田坂さんと佐藤さんに笑顔を向けながらビルの入り口に群がっているゾンビの群れにピンを抜いた手榴弾を2個、2階の窓から投げ入れた。

数瞬後、思ったより大きな爆音が響いた。慌てて窓から階下をみるとゾンビのパーツがバラバラに散らばっていた。車道の反対側でも吹き飛ばされて上半身だけになったゾンビが這いずっている。

ちよつと、いくらなんでも威力がありすぎない？ 半分に減らせれば上出来と思っていたのだけど……

私は内心の戸惑いが表情に出ないように、新たに笑顔を作ると田坂さんと佐藤さんに言った。

「さあ、爆音でいらない連中が集まる前に逃げましょう」

ちよつと言葉が棒読みになっていて私を、疑うような顔をして見ている田坂さんと佐藤さんの背中を階段に向けて押す。これがマンガやアニメなら。私の顔には大きな汗が描かれているだろう。もしかしたら縦線かもしれない……

てんちよ、本当に試作品よね？ まさか、また試作品？ 生きて帰ってとっちめてやるから。私は紅月の下、誓ったのだった。

また試作品？（後書き）

やっと非統制地区内に舞台が移行しました。  
と言いつつ戦闘シーンは無いです。

サブタイトルはもちろん手榴弾のことです（笑  
設定では試作品でなく、店長の試作品です（笑  
後で秋穂にとつちめられる店長の姿が目には浮かびます（笑

さて本日が今年最後の更新日ですが、本日はもう1話更新させていただきます。  
よければお付き合ってください。

## 人狼

目の前に現れた犬のゾンビ達が、一斉掃射を浴びて崩れ落ちる。不思議な事に人間のゾンビは鈍いくせに犬のゾンビはなかなか素早い。

「佐藤さん、慣れてきたじゃない。田坂さん、もっと引き付けてから撃って」

私は銃撃をすり抜けて、懐に飛び込んできた犬に日本刀を突き立てた。ギャンと鳴いて動かなくなる。それを見て不利と見たか犬達が逃げ出す。

「ふう、この銃は年寄りには辛いぜ」

「またまた50代じゃ現役でしょう」

愚痴を言う田坂さんに佐藤さんが軽口を叩いている。一体何が現役なんだか？

「西口まであと300メートル。さあ、元気出して行きましょうか」  
私は2人に言った。通信機は相変わらず通信不能だ。携帯も同様

……このまま本部に行っても情報は得られないかもしれない。

頭の中には最悪な事態が浮かんでいたが、その状態でも短い休息と弾薬の補給は出来るだろう。

パーン。

かすかに銃声が聞こえた。

誰かが戦っている？ 私は迷うことなく助けに走る事にした。

「田坂さん、佐藤さん、西口まで走って！」

言い放って、私は反対方向、銃声のした方角に走る。全力疾走で200メートル弱、廃屋と化したビルを曲がるとグレーのスーツを着た男性が2人走ってくるのが見えた。

「撃たないで！ 味方です！」

私の姿を見た2人の足が止まりそうになったが、私の言葉を聞いて再び走り出す。



「ごめんなさい。今、楽しんであげる」  
私は銀の弾丸を装填そうてんしてあるシグP239を引き抜き、その眉間にポイントした。その瞬間人狼ワウルフと目が合った。人狼は動きを止め、何かを訴えるように私を見る。  
私は引鉄ひきがねを引いた。

## 人狼（後書き）

今年最後の更新が終わりました。お付き合いありがとうございました。来年もよろしくお願ひします。

秋穂の剣術は『薩摩示現流』をモデルにしました。

小説や漫画で『チエスト!』とやっているやつです。実際はそうではないと言う話も聞きますがイメージ的にわかりやすいので採用します。

あと秋穂に『後の先』を取らせたことも、初太刀から勝負の全てを掛ける一撃必殺の示現流からするとちょっと違うかもしれません。薩摩示現流については、私が表面的なことしかわかっていないので間違っていたらごめんなさい。

ちなみに、徹底して『後の先』を取るのが特徴となっている流派は『柳生新陰流』です。

「後の先」……相手の出方を見て、これを捌いた後に技を繰り出すこと。

年明けからも毎週水曜日更新でやってまいります。皆さん良いお年を。

（他の小説は、年内もいくつか更新する予定です）

本部（前書き）

新年早々。こんなことを書くとは思わなかったのですが、今回残酷なシーンが含まれています。かなりソフトな描写にしたつもりですが、苦手な方は回れ右することを勧めします。

## 本部

「大丈夫？ 怪我は無い？」

私は苦しそうに喘いで、地面にへたり込んでいる2人に近づいた。田坂さんと佐藤さんは私の指示で距離を取っている。外見は同じでも中身まで同じとは限らないからだ。

「たしか月村つきむらさんと一緒にいた人達ね？」

私はわざと名前を間違えて訪ねた。

「いや、月島つきしまだ。月島舞奈まいな…… あんたの師匠だろ？」

どうやら本物のようだ。

「舞奈さんはどうしたの？」

「すまない。俺たちを逃がすために困になった」

「そう…… 舞奈さんなら大丈夫よ」

私は2丁あるP90を1丁男たちに渡した。

「さあ、本部に行くわよ」

私は田坂さん達に声を掛け、周囲を警戒しながら先頭を歩く。

「舞奈さん…… 大丈夫よね？」

私は皆に聞こえないよう小さな声で呟いた。

「最悪ね」

本部は、いや本部があった場所と言った方がいいだろう。壊滅していた。

地面にはほんの数時間前まで人間だったものがバラバラになって転がっている。一面血の海だ。その血の海の中央部、広場の中心付近には長テーブルが置いてあり、生首が綺麗に並べられていた。あきらかに殺人を楽しんでいる。

並べられた生首の中にはあの嫌味な警視の首もあり、私たちのほうを恨めしそうに見つめていた。

私の知らないところで幸せになって欲しかったのだけど、世の中そう甘くなかったようだ。彼自身も送り出した部下より先に逝くなんて考えてもいかなかっただろう。私は心の中で手を合わせる。(人-)ナムー。

「もうだめだ！ 俺たちも死ぬんだ！」

後ろで叫び声が出た。先ほど合流した刑事の1人だ。バラバラになった同僚を見て、先ほどまで吐いていたはずだが、この光景に悲観して叫ぶほどには落ち着いたらしい。

私は近づいて行って頬を張り飛ばした。もちろんハンタースーツを着ているので十分に手加減している。パワーアシスト機能が入ったまま本気で殴ったら、そのまま天国に逝ってしまいかねない。

「軟弱者！」

古い某アニメのセリフを言った。

「お嬢ちゃん…… よく知っているな……」

田坂さんがあきれたように呟いた……

やめて、自分でも後悔している。ノリだけでやるものじゃないわね。(ノリでなくていつできる？ という疑問もあるけどさ)

まあ、でも効果はあったようだ。彼は頬を押さえて私の方をおとなしく見ている。

「ええっと、無いよりはあるほうが生存率上がるから、2人1組で武器弾薬をかき集めて頂戴。1人が探して、1人が周囲を警戒、大丈夫？」

「大丈夫だ。だが、お嬢ちゃんは？」

私は田坂さんに後ろにそびえる大きな扉を指さして見せた。

「この状態では望み薄だけどね。扉を開けてもらえるよう交渉してみる。でも、過大な期待はしないで。それから水を探しておいて、出発前に警視さんがクーラーボックスから取り出しているのを見たからあると思う」

田坂さんは片手を上げて答えてくれた。

本部（後書き）

あけましておめでとございます。

新年更新第1弾は本作となりました。今年もよろしくお願いします。

すいません。今回は調子に乗りました。

（-人-）ナムーと『軟弱者！』です。

（-人-）ナムーは顔文字なので、本来使うべきではないのは承知しています。（-人-）ナムナムの方がよかったかしら？

『軟弱者！』は『機動戦士ガンダム』でセイラさんがカイを引っ叩いたときのセリフです。知っている人も多いのでは？

では来週の水曜日にまた会いましょう。

## 選択肢

「ほら、水だ」

田坂さんが放り投げた500mlのペットボトルを受け取った。  
まだ冷たい。

「どうだった？ って、その顔を見ればわかるわな……」

「ええ、上から命令が出たそうよ。6:00まで扉は開かない」

ペットボトルの水を直接飲む。体中に染み渡る感覚がたまらない。  
水がこんなに美味しいと思ったのは久しぶりだ。

「そうか」

ちよつと空気が重い。私は少し明るめに言ってみた。

「大ピンチ、よね」

「大ピンチって秋穂さん、他人事みたいに」

佐藤さんの言葉を聞きながら、私は倒れていたパイプイスを立てて座った。

「ここで質問。この後どのように行動しましょうか？」

私は選択肢を上げていく。

A、この場に留まり夜が明けるのを待つ。

「ただし、ここも安全でないのは見ての通り。」

B、はぐれた人達と合流を目指す。

「合流できたらいいけど、出来なかったら最悪よね。藪蛇にもなりかねない。」

C、当初の予定どおり、容疑者を追う。

「でも戦力的には不安よね。しかも相手の正体が私が考えているとおりなら、返り討ちにあうのがオチね」

「そのあたりを踏まえて皆さんの意見を聞きたいのだけど？」

「ところで、秋穂さんはどれが良いと思います？」

佐藤さん…… 聞いているのは、私なんですけど……

「俺達も、あんたの意見を聞きたいな」

と、舞奈さんと行動していた捜査員からもありがたい言葉をもらった。

それで意見を聞いたら、それにしようというつもりですか？ 日本人らしいけど…… 本当に日本人らしいけど……

今の日本人って、ほとんどの人が外国人の血が入っているはずだけど、こういう所ってかわらないのよねえ。

助けを求めるように田坂さんを見たが、なにやら考え込んでいる…… 駄目だ。私自身はBが良いと思うけど、さて……

「ええっと、私は皆との合流を目指す方が良いと思います。私1人ならここで夜が明けるのを待っても、いいのですけど……」

「……」

「……」

「……」

「……」

ちよっと、何か言ってよ。私、何か悪いこと言った？

「お嬢ちゃん、合流する人の当てはあるのか？」

田坂さんが沈黙を破った。しかし、いつまで人の事を「お嬢ちゃん」と呼ぶつもりなのかしら……

「舞奈、いえ月島さんを探そうかと思っています。無事であればここに向かっているはずですし、負傷していても最後に別れた場所の近くにいると思います」

「それじゃ、行こうか」

ちよつ、ちよつと、田坂さんまで、自分の命が掛かっているよ。そんなのでいいの？

「どうかしたのか？お嬢ちゃん」

田坂さんが私の表情に気が付いたらしい。

「お前ら、他に意見あるか？」

残った3人に聞く。だが、あろう事か3人とも首を横に振った。

パニックになるよりはいいかもしれないけどさ…… つ、疲れた。

体中から力が抜けていく。この人達、生存本能あるのかしら？ 誰

か助けて……

私は心の中で頭を抱えた。

**選択肢（後書き）**

今回もなにやら困っている秋穂でした。

今回もあまり動きがありませんでした。

次回は秋穂の師匠である月島舞奈さんのシーンをお送りします。  
すっかり影の薄いレイ君も登場予定です（笑

ではまた水曜日に。

月島 舞奈

「ふん、人間の割にはよくやった方だな」

黒衣の男が数メートル前にたたずんでいた。私は廃墟の壁にもたれかかり、男、いや、ヴァンパイアを無言で睨みつけた。はつきり言っしてしんどい。あの娘、よく一人でヴァンパイアを退治したものだ。アシスタント達ともはぐれてしまったのは思いのほか痛かった。「ほう、いい目をする。我が花嫁にしてやろうか？」

冗談じゃない。

ヴァンパイアが少しずつ歩みを進める。あと、2メートルまで来た時、私は右手に持ったワイヤーを思い切り引いた。

「ぐおおお、おのれ、人間ごときが！」

目の前でヴァンパイアが極細のワイヤーに罅られている。

「人間を舐めるな。クソヴァンパイア」

さらにワイヤーを引く。目の前で断末魔の悲鳴を上げてヴァンパイアが細切れになる。

「早く、皆と合流しないと……」

足から力が抜けた。視線が低い、バラバラになったヴァンパイアの残骸と同じ高さだ。私の意識はそのまま闇に飲み込まれた。

バラバラにされた肉塊が、グチヨグチヨと蠢くと人型を成した。「このクソアマ、カミラ様の血をもらって無ければ、消滅する所だったぞ。殺す前に、生きている事を後悔するまで、犯しぬいてくれる」

女の腕を掴もうとした時、胸に灼熱感が走った。胸から血に塗れた銀色の切っ先が生えている。消滅する前にヴァンパイアが見たモ

ノは金色に光る双眸だった。

「月島さん、大丈夫？」

俺は目を覚ましかけた、舞奈さんの頬を軽く叩きながら声をかけた。

「あ、貴方は？ 確か、秋穂の所の……」

「秋穂の助手をしているレイ＝ブラッド」

「ヴァ、ヴァンパイアは？」

まだ力ない声で、舞奈は聞く。

「月島さんの横で灰になっていたよ。灰は回収しておいたから、少し休んで秋穂達と合流しましょう」

「あなた1人なの？ 今、秋穂達は？」

「本部の近くで、月島さんといった警官達と合流したよ」

「早く、合流しないと、あの娘に負担がかかりすぎる」

まだ、力の入らないはず身体を起こすと、舞奈にかけられていたレイの上着が落ち、白い肌があらわになる。

レイは舞奈から視線を外した。

「すいません。脱がさないと止血できなかったものですから」

「謝らなくてもいいわよ。ちょっとだけ、そのまま向こうを向いていて」

衣擦れの音だけが静寂に響く。

「もう、いいわよ。ごめん、上着、血で汚れちゃった。帰ったら弁償する」

「いいですよ。気にしなくても」

「駄目よ。お姉さんの言う事は聞きなさい。レイ君に似合いそうなのコーディネートしてあげる。秋穂も一緒にショッピングよ」

「はいはい。分かりました」

早い話が、荷物持ちじゃないか…… レイは、投げやり気味に返

事  
した。

月島 舞奈（後書き）

秋穂の師匠月島舞奈さんの登場です。  
ピンチです。

それにしても、レイは何をやっているのだから。あちらこちらフラフラとしてからに（笑）

次回からある意味新展開です。ではまた水曜日に。

合流　そして

「レイ、舞奈さん」

レイが舞奈さんを抱えて歩いてくるのを見て、私は2人に駆け寄ろうと走り出した。あとから考えると、軽率な行動だったと思う。

「止まりなさい！」

舞奈さんの一喝で、私は足を止めた。舞奈さんはレイから離れ、私より5メートルほど間合いを取って立つ。

「葉月さん。我は魔を打ち破りし？」

あ、舞奈さんの所でアルバイトしていた時の合言葉だ。もちろん一人一人違う合言葉になっている。

「銀の弾丸」

私は答える。すると、いつものように微笑んでくれた。

「怪我はしていないようね、秋ちゃん」

「舞奈さん！」

私は前のめりに倒れ込む舞奈さんを抱きとめた。

「あはは、ごめんね。秋ちゃんの顔見たら、力が抜けちゃった」

「大丈夫ですか？」

「レイ君が、応急処置してくれなかったら、危なかったわ」

「レイ」

レイの名を呼び、姿を探すが……　レイの姿は無かった。あのバカ。なに考えているか分からないけど、どうして何も言わずにいなくなるのよ。携帯で呼び出すが電源を切つてあるようだ。

レイのバカ。

「行きなさい」

唐突な舞奈さんの声。

「えっ？」

「私達に構わずに、追いかけてなさい。秋ちゃん、レイ君の事好きなの？」

私はレイの事をどう思っているのだろうか？ 自分自身に、問い掛け  
てみる。

「わかりません……」

「それじゃ、彼がこのままいなくなるのは？」

「嫌です」

私は即答した。

「なら、追いかけなさいな。彼みたいなのは、捕まえておかないと、  
どこかに行っちゃうわよ」

舞奈さんだけではなかった、周囲の警戒をしていた田坂さんがタ  
バコをふかしながら近づいてきた。

「お嬢ちゃん行きな。レイといったか。彼、訳ありだろ？」

「舞奈さん、田坂さん……」

私は少しだけ躊躇したが、決断した。レイの行動はどこかおかし  
い。私の勘だが、レイは今回の容疑者の女性を知っている。

「ごめんなさい。ありがとう」

私は装備を抱えなおすと非統制区の中心部に向かって走り出した。  
これも只の勘だ。けれどもレイがそこに向かっていていると、私は確信  
していた。

「こっちは、どうする？ 月島さんよ」

秋ちゃん担当の年配の捜査官、田坂という人が訪ねてくる。私の  
コンディションが万全なら他のハンターたちを探しても良いのだけ  
ど、今の私では、4人を庇いながら非統制地区を移動するのは不可  
能だ。

「本部で朝まで持ちこたえましょう」

「本部は全滅したよ」

その情報はレイ君から聞いている。でもバリケードを築いて持ち  
こたえることは可能だろう。

「知っているわ、レイ君から聞いたもの。大丈夫よ。夜明けまで後2時間、どうにかなるわ」  
私は体中の痛みを表情に出さないように微笑んだ。

合流　そして（後書き）

やっと秋穂の足枷あしかせが外れ単独行動です。

ストーリーが加速度的に進むかどうかは、私にも分からなかったりするのですが（笑）

次回は来週の水曜日ではなく、今晚にもUPしようかと思っています。

あとは、聖魔戦記のUPも予定してます。

手掛かり

「あらあら、筑紫と鈴木がやられたのね」

カミラが妖艶な笑みを浮かべる。

「田中もやられたか。レイ君もやるじゃない。柴田も時間の問題ね……」

アルさん相手だと役不足だったかしらねえ」  
自分の下僕が倒されたというのに、カミラは上機嫌だった。長く生きていると刺激がなくなる。だから200年前にわざと逃がしたのだ。

1人は真の不死の一族たる資格を持った若いヴァンパイア。もう1人は自分に対し憎悪をたぎらせる復讐者。ヴァンパイアになってまで自分を追っているのだ。

そして今回の新しい収穫…… 黄金律の娘。200年前と同じ状況を再現してあげたら、どんな反応を示すだろう。すでに死人である体に耐え難いほどの高鳴りを感じる。

「今回は楽しめそうね」

カミラは舌なめずりした。

「くそ！ どこに居る……」

レイは廃墟の中でカミラを捜す。下僕クラスのヴァンパイアを倒したが、カミラの居場所はわからない。

そのレイに金色の影が襲い掛かる。レイは反射的にその影に蹴りを叩き込んだ。影は瓦礫に叩きつけられ止まった。

「ワーウルフごときが、ヴァンパイアにかなうと思っているのか？」  
怒気を含んだレイの声が廃墟に響く。

「ウマク、スキヲツイタツモリダッタガ、カナワヌカ」

ワーウルフがレイに丸めた紙を投げてよこす。開いてみるとこの辺りの地図だった。非統制地区のほぼ中心部に印がつけられている。「カミラサマカラノデンゴンダ。ソノバシヨデマツ。アルセクトトイツシヨニコイ。ダソウダ」

「何のつもりだ？ 何を考えている？」

レイの独白にワーウルフが答える。

「オレゴトキガ、アノカタノカンガエヲ、リカイデキルワケナカロウ」

「夜明けまで時間もない。従うしかないな」

立ち去ろうとしたレイにワーウルフが訪ねた。

「トドメヲ、ササナイノカ？」

「次に俺の前に立ち塞がるようなら、容赦しないさ」

レイは面倒くさそうに答えると、一気にビルの上まで飛び上がった。

カミラは、ビルの上から車道を見下ろす。ハンターの1人が非統制区の中に向かって走り出すのが見えた。

「あらあら、自分から単独行動に出ちゃたわねえ。手間は省けたけど……」

カミラはビルの屋上から身を翻しひるがえハンターの後ろに着地する。

その気配にハンターが反応した。

「誰？」

素早く銃口を向ける。

いい反応ね。少し楽しみたい気もするけど……

カミラは引金を引く隙も与えず距離をつめ、みそおち鳩尾に一撃入れると、ハンターは崩れ落ちた。

「演出の為、協力してもらっわ」

カミラは、ハンターの身体を抱えると、一瞬にして姿を消した。

手掛かり(後書き)

今回はどちらかというところ、カミラさんの話でした。

……今回の話、ちょっとあとがきの書きようが……(笑)

というわけで、また来週の水曜日にお会いしましょう(笑)

ぼやけた意識が戻ってきた。頬に小石の当たる痛みで地面に転がされているのがわかった。無意識のうちに手が銃を捜すが見つかることができない。

「目がさめたかしら？」

女の声、しかも人を馬鹿にした響きがある。私は身体が訴える痛みを無視して体を起こし、顔を声のした方向に向ける。

金髪の背の高い女……それに香水『SEXセクシーYグラフィテGRAFFITイ』の香り。防犯カメラの画像に写っていた女性に間違いない。

「あなたね、ホテルで人を殺していたのは」

「殺す？ 彼等は食料よ。下僕にするまでもないクズ」

女が鼻で笑う。

「ならば、あなたを滅ぼします。たとえ原種のヴァンパイアだとしても」

反射的に腰に手がいくが武器はない。女の姿が消え、後頭部に圧力がかかったのを感じた瞬間、私は地面に押さえつけられた。

「勇ましいのは良いけど、力量の差は把握しておく事ね。武器は捨てさせてもらったわ。それと、原種なんてあんな未覚醒の半端者と一緒にしないでもらいたいわね。不死の一族の私とは別物よ」

ありつたけの力で女を跳ね除けようとするが、ピクリと動かない。「さて、無駄な抵抗は止めて、今から質問に答えてもらえないかしら？」

私はせめてもの抵抗に女を睨みつける。が女はそんな私を無視した。

「美月という名前に聞き覚えは？」

私は首を横に振る。

「そう、あなたはレイと私の関係を知らないのね？」

私は頷いた。

「巻き込んだ私が言うのも変だけど、あなたには知る権利があるわね。時間があれば話してあげる」

女が意味ありげに笑う。

「レイは、あなたの血を吸ったの？」

私は答えずただ睨みつける。

「その目…… あなたみたいなお娘、嫌いじゃないけど、答えてくれないところするしかないの」

女が私の腕をひねりあげる。

「うぐっ」

悲鳴を上げたいのを必死に堪える。

「あと、1センチひねれば折れるわよ。答えてくれないかしら？」  
痛みを耐えながら頷く。腕が解かれた。

「で、どうなの？」

首を横に振った。

「本当ね？ それならレイは私には絶対に勝てないわ。彼は只のヴァンパイア。私を殺すには役不足よ」

女は少しの間、何か考えていたが、私の方を見ると口を開いた。

「それじゃ、あなたにも教えてあげる。レイとアルセクトが何故私を追いかけているわけ…… 200年前の事をね」

尋問（後書き）

秋穂ピンチの状態のまま、次回からレイ君の過去編です。  
レイとアルセクト、カミラの因縁が明かされますよと。結果だけ書くと1行で事足りる因縁ですが（笑）  
ではまた水曜日に

美月（前書き）

皆さん、あけましておめでとう。  
というわけで、本日は旧正月です。

ごめんなさい。水曜日に更新できませんでした。  
旧正月のせいで無茶苦茶忙しかったので。しかも何人が体調不良で  
ぶっ倒れているし。  
では、美月編どうぞ。

美月

「レイ君、いいかげん、起きて朝ごはん食べてね」

私は居候のレイの毛布を剥ぎ取った。彼が行き倒れている所をお父さんが拾ってきて1ヶ月になる。

医者のお父さんの診察では過労という事で、しばらく居てもらおう事にしたのだ。

レイ君の説明では探し物があつて日本中旅しているらしい。らしいというのは、詳しい事は話してくれないからなの。

「美月さん……」

レイの眠そうな声が聞こえてきた。

「レイ君、おはよう。下に朝ごはん用意してあるから食べてちょうだい。ああ、もう時間がない。食器は水につけておいてね」

私はセーラー服の上から着たエプロンを外しながら、階段を下りる。食卓ではお父さんが新聞を読みながら朝食をとっている。

「お父さん、食べながら新聞を読むのは止めてよ」

お父さんが新聞をたたみながら青い目を私に向け、どこか遠くを見るような目をする。

「そういうところ、お母さんに似てきたな」

私のお母さんは3年前に病気で他界した。医者であるお父さんは、病気の発見が遅れたことを今でも悔やんでいる。私も一時期、お父さんを恨んだことがある。でも、完璧な人間なんていない。と今ではそう思っている。

「誰でもそう言うわよ。食べ終わったら食器は水につけておいてよ。私はカバンを持って家を出る。レイ君がウチに居候を始めてから毎朝こんな感じだ。」

「おはよう、美月」

声を掛けてきたのは、クラスメイトの上野うえの桜さくらだ。同じ弓道部に所属している。

「おはよう、桜」

「ねえ聞いた。昨日、また襲われたらしいよ」

「吸血鬼？ ハンターも動いているのでしょうか？」

私の反応に桜は眉をひそめた。

「もしかして、新聞読んでないの？ 2人ほど振り返ちにあったって、事件情報は読んだ方がいいよ。危ないからさ」

「うん、でもそんな時間ないよ。手にかかるのが居るもの」

私はため息をつく。そうは言いながらも、その手かかることがキライではない。

「そんな事言ったら、おじさんかわいそうよ」

だが、いまだき珍しい事に家事が全く駄目なのは事実だ。放っておけば、朝昼晩と食パンを焼くどころかジャムもつけずに食べて暮らすだろう。

「でも、事実だからさ」

私は桜に、あはは、と笑ってみせる

「話変わるけど、レイ君は今日来るの？」

「何も言っただけで来たと思う。お父さんに頼まれているみたいだし」

最近このあたりで多発している、吸血鬼による通り魔事件のせいで、何かと物騒だとお父さんがレイ君に私の迎えをお願いしたらしい。

「レイ君かっこいいじゃない。私は美月がうらやましいよ」

私は眉間にしわを寄せる。

「かっこいいけどね。手にかかる弟ができた…… 感じかなあ」

「レイくん。今日もお迎え？」

学園の敷地に入ると、すっかり顔見知りになった女生徒から声が掛かった。

「そうなんだ。それは置いておいて、今夜、僕と月夜のデートと洒落込まない？」

「やーよ。美月に怒られたくないもの」

女生徒がケラケラ笑ながら答える。どうわけか、僕は美月の所有物と言う事になっているらしい。美月本人が言うわけがないのでソース元は美月の友人、桜の方だろうか？

そうこうしているうちに弓道場についた。この付近は、見学と称した男子生徒がちらほら見える。弓道着をきた女の子の凜とした魅力は物凄くわかるのだけだな。

美月は弓道場の真ん中に居た。弓を引ききった状態で矢を放つタイミングを計っている。射法八節でいう『会』の状態だ。弓道の見せ場と言ってもいい。まるで一枚の絵のようだった。

僕の視線は美月の凜とした美しさに目を奪われていた。そして、『離れ』『残心』矢を放った後の姿勢を維持する。放たれた矢は、パン！と音がして的の真ん中を射抜いていた。美月が目を閉じ姿勢を戻して息を吐くのが見えた、身体から力が抜けるのを待って目を開く。そしてその黒檀のような瞳と目が合う。

「あ、もう来ていたんだ」

美月がテクテクとやってくる。

「おう、事件のせいで、アルセクトさんに頼まれているからな」  
「何だが胸の辺りがドキドキとする。」

「もうすぐ終わりだから、少し待っていて」

美月を見送ると近くにあるイスを引き寄せ座り、ポケットから缶コーヒーを取り出すと口をつける。

今日は、なんだか得したような気分になるのは気のせいだろうか？

美月（後書き）

美月ちゃん編です。

秋穂と違い外国人の血が入ってますが、純血の日本人である秋穂にそっくりさんです。

きつと母親似なのでしょう（笑

では来週水曜日にお会いしましょう。

来週は多分大丈夫だろうと……

## 黒い影

「美月ごめん。先に行くね」

シャワー室で汗を流していると、桜が声をかけてきた。

「どうしたの？」

「見たいテレビがあるんだけど、録画予約忘れちゃった。それじゃーね」

桜はバタバタと出て行った。

見たいテレビねえ。あ、桜が好きなアイドルグループがトーク番組のゲストとか言っていたわね。確か、あと10分かそこらしかないけど、間に合うのかしら。

「レイ君、毎日迎えにこなくてもいいよ。レイ君も何か目的があって旅をしているんでしょ？」

「まあ、別に急いでいるわけでなし、ゆっくりでいいさ。美月達が迷惑なら考えるけど」

チラツと美月のほうを見たレイに、美月は慌てて首を振る。

「そんな事無いわよ。ほら、お母さんが死んでからは、お父さんと二人暮しだったから、家族が増えたようで楽しい」

「そう言ってくれると助かる。ん？」

路上にカバンが転がっている。レイが拾い上げる。かばんには見慣れたマスコット人形がぶら下がっていた。

「これ、桜の」

吸血鬼……最近頻発している。吸血事件が頭に浮ぶ。でも、人通りが少ないとはいえ、まだ明るいこんな住宅街の中で……

「桜！ いるの？ 返事してー!!」

20メートルほど先の十字路まで走る。正面と右には居ない。左、居た！

薄暗い街頭に浮ぶ。美月のほうに手を伸ばしている制服姿の少女と、その少女に絡みつく黒い影。

「桜！」

美月が叫ぶと同時にレイが黒い影に飛び掛るが、一瞬にして黒い影は掻き消えた。美月には影が消える瞬間、ニイと笑ったような気がした。

レイが倒れる桜を抱きとめる。

「レイ君」

「吸血されているが、まだ息がある。急いで病院に運ばないと」

「うん、お父さんの勤めている病院が近いから。救急車呼ぶより直接行った方が早いわ」

私はお父さんの携帯電話に連絡を入れた。

私とレイは、処置室前の待合室に並んで座っていた。お父さんは処置室からまだ出てこない。警察への通報と桜の家族への連絡は、顔見知りの看護師さんがしてくれた。

廊下に足音が響いた。やってきたのは、桜の両親だ。

「美月ちゃん。桜は？」

「今、中です。おばさん、ごめんなさい。待たせてでも一緒に帰っていけば……」

「いや、君らが見つけてくれなければ危なかった。あまり自分を責めないで」

桜のおじさんはそう言ってくれたが、そうわりきれぬ訳ではない。その時、処置室の扉が開いてお父さんが出てきた。

「お父さん？」

「先生！」

「もう大丈夫ですよ。後は、体力が回復するまで入院してもらいます」

「先生、ありがとうございました」

桜の両親はお父さんの手を握って喜んでいる。本当に良かった。

私は安堵から長椅子に座り込んでしまった。よかった、本当によかった。涙が溢れた。

「美月、良かったな」

レイが微笑んで言うてくれた。

「レイ君、ありがとう。私一人だったら桜を運べなかった」

「お喜びのところ、よろしいかしら？」

後ろから声をかけられた。振り向くと、いつの間に来たのか金髪に蒼い瞳の女性が立っていた。ダークスーツの上からでも、出ているところは出ていてしまる所はしまっているのが判る。ボン、キュッ、ボンッて、感じた。男の人ってこういう方が好きなんだろうなと思う。

「警察のカミラ」東條です。事件の目撃者はあなた達？ 話を聞きたいのだけどいいかしら？」

微笑む女性。何故か、彼女の笑みをどこかで見たような気がした。

黒い影（後書き）

展開的にはバレバレなんです（笑

美月編が後2回ぐらいかな。

## 吸血鬼

私達4人は夜の屋上に出た。

刑事さんとレイ君、お父さんと私の4人だ。お父さんが部屋を用意すると言ったが、刑事さんが、室内は人も多いので屋上の方が良いと言ったせいだ。春とはいえ夜の風はまだ冷たい。

「やはり部屋を用意しましょうか？」

「いいえ、こちらでよろしいですわ。邪魔じゃまも入りにくそうだしね」  
刑事さんの瞳がその髪と同じように金色に輝く。

「?!」

思い出した、桜に絡みつく黒い影の瞳と同じ金色の瞳とその笑み。  
「桜を襲ったのはあなたね」

「鋭いわね、お嬢さん。じゃあ、私がここへきた理由もわかるかしら？ あなたよ、黄金律おうごんりつのお嬢さん」

「アルセクトさん、美月を連れて逃げて！」

レイ君が私と刑事、いやカミラの間に割り込んだ、そのレイの瞳も金色に輝いている。

「原種げんしゅのヴァンパイアでも私の敵ではないわね。レイと言ったっけ？ その娘の血をまだ吸っていないでしょう？」

カミラがさげすむように笑う。

「それがどうした？」

「本物の不死ノーライフキングの一族になっていないあなた……　　いいえ、原種としても完全に覚醒していない君きみでは私に敵わない。そう言っているのよ。たとえばこんな事」

カミラが右腕を横に振ると同時に、弾かれたレイ君の身体は、フエンスにぶつかって止まった。カミラの腕は直接レイ君に触れていない。カミラの口調だと何らかの能力のようだ。

「できないでしょう？」

私はレイ君に駆け寄り、抱き起こす。

「大丈夫だ！ 早く逃げる」

「で、でも」

カミラがゆっくり近づいてくる。その前にお父さんが立ち塞がった。

「美しい愛情だけど、無駄ね」

カミラが両手を前に出し握る仕草をした。

「ぐわーっ」

とたんに、鈍いなが折れる音が響いて、お父さんが倒れた。

「お父さん！」

「まずは、両足。次はどこをお望み？」

カミラの履くピンヒールが、お父さんの右上腕部を踏みつける。次の瞬間、鈍い音がして折れた。

「ちくしょう」

レイ君がカミラに飛び掛る。

「あはは、おそい、おそい。これをあげる」

私の目には何が起こったのかわからなかった、気が付いたときにはレイ君の両腕に銀色に光るナイフが柄の部分まで埋まっていた。

「ぐっ」

「あはは、銀のナイフよ。ヴァンパイアの優れた回復力でも簡単に回復できないわよ。これもプレゼントするわ、遠慮しないで」

カミラが腰に下げた銃を抜きレイの両足を打ち抜く。レイ君は、うめき声ひとつ上げずにカミラを睨んだ。

「美月、逃げる」

「美月、逃げなさい」

レイとお父さんが同時に叫んだ。

「逃げても良いわよ」

カミラが意外な事を言った。

「この二人が死ぬまでの間、逃げる時間をあげるわ」  
私を見てカミラは嬉しそうに笑った。

吸血鬼（後書き）

カミラにまったく歯が立ちません。

レイ君も作中にあるように不完全な状態ですし、アルセクトさんはまだただの人間ですからねえ。

そんな状況下、美月の出した答えは？

次回で美月編は終了です。

では来週の火曜日に…… いや明日の今ぐらいの時間に臨時で更新します。

## 死と覚醒

この2人が死ぬまでの間、逃げる時間をあげるわ」

私のほうを見てカミラは嬉しそうに笑う。

「俺たちに構わず、逃げぐううう」

カミラがレイ君の肩に刺さったままのナイフの柄を踏みつけた。

「少し黙ってね。ほら、逃げるなら早くしなさい」

言い終ると同時に、カミラの脚がレイ君の胸を踏みつける、ピンヒールが少しずつめり込む、必死に堪えるレイ君の顔が苦痛に顔が歪む。

「……なして」

「なにかしら？」

「レイ君を放して！」

私は正面からカミラを睨み付けた。

「あなたの目的は私なのでしょ。2人は放して」

「そう、あなた怖くないの？ 自己犠牲なんて流行らないわよ」

私はカミラから目をそらさずに真っ直ぐ見据える。絶望的な状況に腹が据わった。それなら最悪の事態だけは避けなければならぬ。「私が逃げたら、レイ君やお父さんだけじゃなくて、私を追う間に会った人を殺すつもりでしょう？ 貴女のせいで死んだのよとか言っ」

私はカミラの性格を理解していた。カミラはただ殺すだけでなく、精神的に追い詰めて鬨るのが好きなようだ。私にも同じことをするだろう。

カミラが一瞬、きよとんとした表情をした。

「当たらずも、遠からずかしらね。貴女の友人をヴァンパイアにしてあげようと考えていたのだけど、友人達に追いかけられるのも楽しいわよ。きつと」

「貴女の喜ぶ事なんかしてあげない。ここで貴女に殺されても、魂

は、私のもの。貴女にはあげない」

私ではカミラから逃げることは出来ない。それが分かっているからカミラも余裕を見せているのだ。でも、私はカミラに屈するつもりはない。

「あははっ、何年ぶりかしらね。ここまでではつきり言う娘なんて。命乞いならたくさん聞いたけど。いいわ、貴女の勇敢さに免じてこの二人は助けてあげる」

「ごめんなさい。お父さん、レイ君…… 二人は生きて」

私は2人に対して微笑を浮かべる。

そんな私にカミラが近づき、そして首筋に牙を突き立てた。

「ちくしょう！ やめろ！」

俺はいう事を聞かない四肢を懸命に動かし、美月の元に少しでも近づこうともがく、いつもは何でもない数歩の距離が果てしなく遠い。

そんな俺の目の前で、美月の首からカクンと力が抜けた。両腕も真っ直ぐに地面に向かい垂れていた。アルセクトさんが何か叫んだが、俺の耳には届いてなかった。カミラの姿さえ目に入らない。

「美月、美月いい」

ただ美月の名前を呟きながら、懸命に四肢を動かす。その俺にカミラが何事が告げ姿を消す。だがそんな事など、どうでもいい。

いつの間にか美月の顔が目の前にあつた、とてつもなく時間がかったような気がするが、実際は1分もかかっていない。右手が美月の頬に触れるまだ温かい。だが、急速に下がっていく体温が美月の死を俺に認識させた。

「カミラアアアア！」

悲しみが急激に引いていき、代わりに怒りが俺の意識を乗っ取る。これまで遅々として回復しなかった傷口が塞がり、両肩に刺さった

ままのナイフを筋肉が押し出す。

急激きゅうげきに伸びた髪が俺の視界を塞ふさぐ。いつものような黒い色ではなく、カミラと同じ金系のような髪が。

金色に光る双眸そくめいで、カミラの消えた方角を見据みすえた俺はもう一度、  
吼ほえた。

「カミラアアアア！」

いつの間にか、季節外きせつはずれの春の雪が降り出していた。屋上で美月の身体を抱えた俺の上に落ちては消える。俺は何もできずにカミラ叩きのめされたのだ。カミラの去り際のセリフ……

「その娘の血を吸いなさいな。まだ間に合うわよ。只のヴァンパイアでは私には敵わない。私を倒したかったら、真の不死ふじの一族いちぞく、ノライフキングになることね。私を追ってきなさい、いつでも相手になってあげる」

カミラに対する怒りに任せて、美月の血を吸おうとした。だが、美月との思い出が脳裏のうりに浮かび、牙を突きたてることはできなかった。

たった1ヶ月、こんな短じかい間あいだに、美月の存在がとても大きくなっていった。俺は、美月の事が好きだったのだと、愛していたと思いき知らされた。

そして、美月の身体を抱えたまま、俺はもうひとつのことに気がついた。

ヴァンパイアという化物ばけものになった今でも、まだ涙が流せるという事に……

死と覚醒（後書き）

今回で美月編が終了です。物語も2話終了に向けて一直線といきたいところでは。

今回でレイとアルセクトの行動の動機が明かされました。『復讐』です。

まあ、本編内で何度か仇がどうとか話してましたけど（笑）その復讐が達成されるのか乞うご期待（笑）

次回は来週水曜日更新です。

## 黄金律

「……………」  
聞いてはいけなかったのかもしれないレイの過去。アルセクトという、ヴァンパイアとの関係もわかった。

アルセクトは、望んでヴァンパイアとなったのだろう。娘の仇を討つために……そして、レイもカミラを追い続けた。

どうせ聞くなら、レイの口から聞いたかったというのは、私の感傷だろうか？ もともと、人に簡単に話す事ができる話ではないのだけ。

「どう感想は？」

私は何も言わずカミラを睨んだ。

「あは、怖い、怖い。怒った？」

「……………」  
私は無言、これ以上はカミラと言葉を交わす気はなかった。

「あの時に、私は言っておけたのよ。あの娘の血を吸いなさいとね。それを無視して、彼女やあなたのような黄金律おっこんりつの身体からだの娘がいても血を吸わない。あきれたわ」

黄金律の身体。美月という娘こと私の共通項。思わず質問していた。

「黄金律ってなに？」

「黄金律と一言にいつても解釈は色々だけど、私たちの言う黄金律は血液のことをいうわけ、血液に特殊な魔力を含む人間のこと。その血は私たちを進化させることが出来る」

カミラが私を見て意味ありげな妖艶な笑みを浮かべる。

「ただの原種のヴァンパイアである今のレイでは私には勝てない。でもあなたの血を飲めば真祖しんそのヴァンパイアになって私と互角以上に戦えるかもね。でも今回は間に合わないわね。黄金律のあなたは私の手の中、レイにはあの時と同じ屈辱を味わってもらおうかしら、そうなればあなたの血を飲む気にもなるでしょう」

面白そうに笑うカミラを私は睨み付ける。

「大人しく協力すると思ってるの？ あの娘も言ったのでしょ。あなたの好きにはさせない」

「ふふふ、あなたの意思なんて関係ないの。レイがどう感じるかが問題なのよ。もう一度、自分の無力感を味わってもらおうわ。だからと言って、変な事を考えないことね。でないと、がんばったレイ君達の前に、あなたの死体がぶら下がるわよ」

私はぶいとカミラから視線を外した。これ以上カミラの話聞く気にはならなかった。それよりも、レイの過去をレイ自身の口からでなく、カミラの口から聞いてしまったことに自己嫌悪しているというのが一番近いかもしれない。

「アルセクト！」

俺はアルセクトがいるであろうビルに降り立ち、アルセクトを呼んだ。彼の下僕からの情報だから間違いは無いはずだ。

「相変わらずうるさいやつだ。どうかしたのか？」

「アルセクト来い。カミラの居場所がわかった」

アルセクトはいぶかしげに俺を見る。

「どう言うつもりだ？ 早い者勝ちの筈だ」

俺はアルセクトに地図を渡した。

「地図？」

「完全に開け」

地図の中心部には丸く印がされており、『アルセクトと共に来る事。これが条件。カミラ』と記されている。

「なるほどな。私たちはカミラの手の上という事か。おもしろくないな」

「時間も無いことだし、条件を飲んででも対峙しないことには話が始まらない」

「逃げられては、元も子もないか」  
俺とアルセクトは、カミラの元に向かった。すべてにケリをつけるために。

黄金律（後書き）

今回、簡単にですが、黄金律の説明が簡単に入りました。  
やっとだな（笑）  
まだ完全に説明してないですけどね。

とりあえずヴァンパイアの種類についてまとめ  
上から順番に。

真祖 カミラ

能力的な超えられない壁（身体能力をはじめあらゆる面で真祖は別  
格）

原種 レイ、カミラの支配下のヴァンパイア

主人 アルセクト

下僕 その他、雑魚<sup>ザコ</sup>

鮮血の夜(前書き)

残酷シーンというか、血の描写が今回含まれています。  
苦手な方は自己判断でお願いします。  
出来る限りソフトな描写にしたつもりですが、あくまで『つもり』  
『つもり』  
です(笑)

## 鮮血の夜

私はカミラに襟首をつかまれている。

「あまり動かない事ね、簡単に折れるわよ。ほら来たわよ」

屋上に黒い影が舞い降りる。ひとつは、もう見慣れたレイの姿いっつもと違うのはすでに瞳が金色に輝いているそして髪の色が茶髪から銀色になっていることだ。

もうひとつは、赤い瞳のロマンスグレーのおじ様。そして、黒のタキシードに裏地が赤いマントでいかにも吸血鬼という格好。多分、彼がアルセクトという吸血鬼だろう。

「遅かったわね。思い出話もあきたし、この娘いじめようかと思っ  
たじゃない」

『カミラ！』

レイとアルセクトの声が重なる。

「おっと、動かないでよ。あなたたちが距離をつめるより、首をへし折る方が早いと思わない」

カミラは楽しそうだ。

「何か考えがあつて我々を呼び寄せたのだろう？ なに用だ」

私でも感じ取れるほどの殺気を放出させているレイに比べて、アルセクトは冷静のようだ。ただカミラをにらむ目からすると、どのような葛藤<sup>かつどう</sup>が内心で渦巻いているのか容易に予想できた。

「アルセクトさんは、せっかちなね。それじゃ、2人には殺し合いを  
してもらおうかしら。賞品はこの娘と、私への挑戦権どうかしら」

「レイ君、駄目！ ぐっ」

カミラが片手で私を吊り上げる。

「賞品は大人しく黙って見ていけばいいのよ。どうするの？ ふたりとも、この娘200年前の娘にそっくりよね。もう一度目の前で死ぬところを見る？」

「だ、だめ、レイ…ぐっ」

カミラが首を掴んでいる手に力をこめると一時的に息が出来なくなる。

「おだまりと言っているのよ」

「やめる！ やるよ」

カミラが力を込めるのをやめる。レイがアルセクトと向き合う。

「すまないな、アルセクト。俺は、秋穂が死ぬ所は見たくないんだ」

「私も、仇をみすみす逃がすわけにはいかない」

2人の間に殺気がみなぎる。

駄目、2人を止めないと。私でも分かるカミラはレイとアルセクトよりも強い。1人では勝てない。だが、カミラはレイとアルセクトを自分よりも弱いと侮っている、2人の連携次第では勝ち目もあるのに……

幸いカミラの武装解除が甘いせいで手持ちの武器はまだある。ブーツに隠してあったレイのナイフと…… 気づかれないように左手でナイフを抜く。

「さあ、楽しませて頂戴。勝ったほうにご褒美をあげるからね。あはは」

「アルセクト、本気で来いよ」

「バカ言え、こっちのセリフだ」

レイが先手を取る。アルセクトの首に蹴りを叩きこもうとするのを、アルセクトが右手で受け止める。次の瞬間アルセクトの両手に銀色に光るメスがあらわれた。それを首の動脈めがけて振るう。レイは寸でこのところで避けるが、服が切り裂かれる。

「だめえええ」

叫ぶと同時に、私の襟首を掴んでいるカミラの左腕にナイフを突き立てた。銀のナイフをつきたてられては、カミラの左手から力が抜けた。だが、すかさずカミラの右手が喉元に当てられる。

「あなた、いらないわ。バイバイ」

喉に当てられていたカミラの右手が、すっと横に引かれた。

喉から熱いものが込み上げてきて、視界が赤く染まる。

反射的に左手で喉を押さえる。暖かい液体が左手を濡らし、ぼたぼたと滴り落ちるのが分かる。

痛みはなく、ただ熱い。切り裂かれた喉のどもそれを抑える左手も……死という言葉が脳裏に浮かんだ。

私、死ぬの？

だが、言葉はでなかった。

レイの姿が視界に写る。

レイ…… ごめん……

背中をポンと押された。それに逆らえずに、私は倒れていった。

鮮血の夜（後書き）

やっちまった。

どうすんだこれ。

多分、今日か明日中にもう1話更新。

## 重荷

レイ…… ごめん……

背中をポンと押された。それに逆らえずに、私は倒れていく。

ガキンと音が鳴って、右腕のギミックが勝手に作動する。右手の中には鋼の感触。

その存在に気が付き、私は身体をひねった。

「がは…… あふ……」

肺に残った空気が押し出され、口から血が溢れた。けれど、そんな事気にしてはいられない。

カミラの顔が見えた。

渾身の力で、右手をカミラに向ける。そして指先に力を込めた。

『人間をなめるな！』声は出なかったが、私の唇ははっきりと血を溢れさせながら動いた。

落下が止まった。したたか地面に打ち付けたはずだが、もう痛みすら感じない。

視界がぼやける。端の方から暗く、白く、世界が色を少しずつ失っていく……

レイの金色の瞳が見えた。私は、冷たい地面に横たわっているわけではなく、レイに抱きとめられたらしい。

駄目だよ…… 服が汚れちゃうよ。

レイが、何か言っているが、はるか遠くに聞こえはつきりと聞き取れない。

ごめんね……

とぎれかける意識を集中して唇を動かす。

最悪だ。美月さんのことを、いいえ、レイと出会ったときから、私はこんな死に方をしてはいけなかったのだと思う。

レイは、自分を責めてしまうから。

レイの責任じゃないと言っても、重荷を背負ってしまっから。だからこんな死に方をしてはいけなかった。これ以上の重荷を背負わせてはいけなかった。

ごめん…… レイ……  
でも、私はレイに重荷を背負わせなければいけなかった。更なる重荷を……

ごめんね。残酷だよ…… でも、あなたにしかできないことなんだ。

もう目が見えなくなっていた。レイの顔を見なくて済むのは救いかもしれないが、少し寂しかった。

……吸って。  
もう一度、ゆっくりと唇を動かす。

私の、血を…… 吸って。

レイの姿を見ることはできないのに、なぜか、レイが首を振っているような気がした。

だ・め。

だめなの。レイが止めてくれないと誰が止めるの？

私の……血を……吸い……なさい……レイ……ブラッド……あなたが……止める……の……もう……こんな事……二度と……お……お願い……レイ……残った力で想いを伝えるために唇を動かす。

ごめんね、レイ。

リーフでの何気ない、いつもの風景が脳裏に浮かんだ。マスターがいて、秋保さんがいて、レイがいて、私がいる。何気ない、穏やかなやさしい時間。

ごめん。

私が壊したんだ。

ごめん。もう戻れないよね？

でも、レイと会えてよかったよ。

たのしかった。

ありがとう。



重荷（後書き）

今日はいけるところまで行こうか。といってもあと1話か2話ぐら  
いだけだね。

で、本当にどうするよこの展開……  
タイトル変更？

## アカイメザメ

「秋穂！」

倒れる秋穂に向かい走る。その俺の前で秋穂は、カメラに右手を向ける。その手の中には、小さな銃、ダブルデリンジャーが握られていた。

完全に油断していたカメラはそれを避けらず、腹部に命中する。アルセクトがすかさずカメラに銀のメスを投擲する。だが、今の俺にはそんなことはどうでもよかった。秋穂めがけて走りより彼女の身体を抱き止める。

「秋穂！」

秋穂の傷口を手で抑えながら叫ぶ、傷口を抑えた手が紅い液体で濡れる。

「秋穂！」

もう一度叫ぶ、秋穂と目が合うと秋穂の口元に笑みがかすかに浮かんだ。

駄目だよ…… 服が汚れちゃうよ。

声は出なかつたが秋穂の唇が動いた。あふれ出た血液が口元を紅く染める。

「馬鹿言つてないで、喋るな」

だが、俺にはどうすることもできない、ただ傷口をおさえるだけだ。俺には医学的知識も無ければ、一瞬で傷口を塞ぐような魔法も知らない。

「ごめんね。」

「喋るな」

声に焦りが混じる。周りを見回したが、カメラの姿もアルセクトの姿も見えない。屋上には、秋穂と2人だけだ。

どうしたいい？ ふと、脳裏に吸血鬼化という単語が浮かんだ。

駄目だ！ 即座に打ち消す。

秋穂を化物に変えてしまうのか？

日の光が似合う秋穂を闇の住人にしてしまうのか？

親しい人を失う悲しみを秋穂にさせるのか？

当たり前の人間としての生活を捨てる事を俺のエゴだけでそれを秋穂に押し付けるのか？

できるわけが無い。

だが、俺は、秋穂を失いたくない。俺は…… 俺は。

……っ。

秋穂の唇の動きを見落とした。もう一度、秋穂の唇がゆっくりと動いた。

私の…血を……吸って…

俺は、反射的に頭を振っていた。

美月の事件の後、人から直接血液を摂取したのはアルセクトを吸血鬼にしたときだけだ。ずっと輸血用の血液パックと、相手の気を吸い取る事しかしていない。美月のことが完全にトラウマになっていた。

アルセクトのときも、後から全て吐き出してしまった。

生き血の吸えないヴァンパイア、小説のネタにもなりはしない。

私の…血を…吸い…なさい…レイ……ブラッド……あなたが…止め…る…の…もう…こんな事…二度と……お…お願い……レイ…

秋穂が紡ぐ想い。これ以上美月や秋穂のような犠牲者を出さないように、カミラを倒す。それは、理解している。だが、そのために君の血を吸えというのか。

戸惑う俺の頬に、秋穂の手が添えられた。その手が後頭部にまわされる。

次の瞬間、秋穂が俺の頭を引き寄せた。俺の唇と秋穂の唇が重なる。

口の中に血の味が広がった。身体中の細胞がざわめき立ち、腹の奥から絶えがたいほどの熱が湧き上がり体中を駆け巡る。

身体を、精神を、焦がしてしまいそうな焦熱と共に湧き上がる感情…… 歓喜…… 数百年ぶりの生き血に吸血鬼としての本能が叫ぶ。もつと吸え、もつと血をよこせ、と。

「クツクツクツ、アハハハ」

歓喜の笑いと共に、秋穂の喉に牙を立て、血を啜<sup>す</sup>る。

血を啜りながら、両目からこぼれ落ちた暖かい透明な液体が、頬を伝うのを感じた。

アカイメザメ（後書き）

レイ君がとうとう秋穂の血を飲みました。  
カミラに対抗することが出来ます。

でも、問題は秋穂のほうなんです（笑

## カミラ VS アルセクト

紅い液体のどろりとした感触が、舌に、喉に、そして食道を通り、胃袋に落ちていく。腹のそこから激しい熱が湧き上がる。

その身を焦がす熱に触れたのかのように、両頬を伝う透明な液体が枯れる。

その代りに沸き起こるのは、血への渴望…… 吸血、どこまでも卑しい、浅ましく、忌まわしい行為。

身体を焦がすような熱に、うなされるように血を啜る。

どれくらいそうしていただろうか、レイは秋穂から牙を外した。

そこに残るのは、すでに命の鼓動を止めた青白い顔の女性。

「秋穂……」

レイは呟く、だがその感傷もあつという間に消え失せ、胸が高鳴った。顔が自然に緩むのがわかる。身体の中で何かがはじけた。レイは屋上から身をひるがえした。

「しつこいわね」

カミラは、いまいましげに吐き捨てる。腹の痛みさえ引けば逃げることもないのだが、銀でつけられた傷は自然回復しない。

カミラは足を止めると、追跡者に向き直る。

「しつこい男は、もてないわよ。ミスターアルセクト」

「こんなチャンスは、なかなかないのでな。美月の仇を討たせてもらおう」

アルセクトは、両手に数本のメスをかまえる。

「あら、このぐらいの傷で、あなたとの能力差が埋まったとでも？」

「さあな、だが無傷のお前とやりあうほどバカじゃない」

「そうお考えなら試してみたら？」

カミラはアルセクトに向かい歩き出す。間合いも何もあつたものじゃない、そのへんのコンビニにでも行くような足取りで近寄っていく。アルセクトが構えたメスの先が動揺に揺れた。

アルセクトは、地を蹴つて距離をとりながら左手に構えた3本のメスを投擲する。

「甘い！」

カミラは、いとも簡単にメスを払い落とす。

「あなたと同じ主人クラスや下僕クラスなら遠距離戦でもかまわなけれど、私達クラス相手なら近距離戦の方が可能性はあるわよ。物理的な強度は、下僕も私も変わらないのだから」

カミラが一気に距離をつめ、アルセクトの右手首を捕まえると、握りつぶした。アルセクトの右手がメスを握つたまま地面に転がり、灰になる。

「がっ」

苦痛に顔を歪めなら、アルセクトが蹴りを放つが、カミラが左手で止め掴んだ足首を握りつぶす。

「あははは。わかった？ このくらいの傷、レイ君くらいだとハンデになつても、主人クラス相手ならハンデにもならないのよ」

カミラは、圧倒的な力でアルセクトの両手両足を引きちぎる。周囲に紅い血液が撒き散らされるが、引きちぎられた四肢は灰となり崩れ去る。

「簡単には殺さない。吸血鬼といえ、四肢の再生には時間がかかる。あなたにはレイ君の最後を見てもらおうかしら」

カミラは、アルセクトを一瞥して言い放つと、自分の手で腹部の傷を抉り取る。

「ぐっ！ がはあ！」

傷口が大きく広がったが、遅々として再生しなかった傷が、みるみる塞がっていく。

「ふふふ、いいわね。痛みがないというのは…… 久し振りよ、こ

んなに痛い目にあつたのは。しかも、人間ごときに…… 来たわね」  
アルセクトの側に、レイが姿を現す。その顔には笑みが張り付いている。

「レ、レイ、お前」

「そう、あの娘の血を飲んだのね。でも、私を追うのは少し早かったのではないかしら？」

カミラの問いに、レイは歓喜の笑いで答えた。

「クツクツクツ、くはツははは。カミラ、闇に帰れ！」

## カメラ VS アルセクト（後書き）

ヴァンパイア同士のバトルに突入。

でもアルセクトさんはあつという間に敗北。

真祖と主人じゃレベル差ありすぎですね。

本文中であった物理的強度というのは、肉体の頑丈さですね。これはどのクラスのヴァンパイアでも人間とあまり変わりません。

そして、レイ君が怪しげなクスリをきめたみたいになっています…

… 正気に戻るだろうか？

多分日付は変わるでしょうが、もう一本更新して、また来週ということになりそうです。

カメラ VS レイ(前書き)

バトルシーンがありますので、一部残酷というか、えげつないというか、そんなシーンがあります。

## カミラ VS レイ

見つけた！

血臭をたどって追いかけてくると、カミラが四肢をもがれたアルセクトの側に立っているのを見つけた。

「クツクツ」

笑いが込み上げてくる。俺はアルセクトを挟んでカミラとは反対側に立った。身体を蝕む熱が俺を笑顔にさせる。

「レ、レイ、お前」

アルセクトが無様に転がっている。まあ、アルセクトも吸血鬼だ、1時間もすれば再生するだろう。

「そう、あの娘の血を飲んだのね。でも、私を追うのは少し早かったのではないかしら？」

まだ余裕を見せるカミラに、腹の底からの笑いが漏れる。ここに来るまでの間に身体能力が格段に上がっているのは、確認済みだ。負ける気はしない。

「クツクツクツ、くはッははは。カミラ、闇に帰れ！」

明るい満月の月明かり。だが今宵の月は紅かった、血に染まったような紅。これから始まる死闘を暗示しているかのように。

先に動いたのはレイだった。カミラの懐に飛び込んで、足を払うように下段への回し蹴り、カミラはひょいと飛んで避けるが、レイは回し蹴りの勢いを利用してそのまま一回転、中段へ回し蹴りを叩き込む。

避けられないと判断したカミラが、右腕でガードするが骨を粉々に碎かれる。が、折れた腕が、みるみるうちに再生する。

「ふん、満月の晩でなければ厄介だったわね」

カミラが右腕を振りながら、余裕の笑みを浮かべる。

レイもカミラも武器は持っていない。いや、必要ないのだ。その怪力自体が武器になる。不死性<sup>ふしせい</sup>、変身能力<sup>へんしん能力</sup>、身体能力<sup>しんたい能力</sup>、反射神経<sup>はんしゃしんけい</sup>、etc etc。しかし、最も恐るべき能力は純然<sup>じゅんぜん</sup>たる暴力<sup>ぼりき</sup>、「力」だ。何しろ人間の手足を人形のように引きちぎることもできるのだ。今度は、同時に地を蹴った。互いの拳<sup>こぶし</sup>が、ぶつかり合い骨が砕ける。全くの互角に見えた。だが、カミラは余裕のある顔を崩さない。カミラは再生したばかりの右手の平を上に向けて、おいでと手招きする。

レイはカミラに向かって突進する。捕まえてしまえばいいのだ。先に捕まえさえすれば勝負はつく。

接触の直前、カミラはゆらりと後ろに飛びながらレイの右手首を左手で掴み、くるとコマのように回った。目の前に無防備になったレイの首筋が見えた。

頸動脈<sup>けいどうみやく</sup>。カミラは下品なほど大きく口を開けレイの首筋に噛み付いた。鋭い牙に皮膚が簡単に破れ、血液が噴き出す。その血液をカミラは貪欲<sup>どんよく</sup>に飲み込む。だが、それが隙<sup>すき</sup>を生んだ。

レイはカミラの両目に指を突っ込む。柔らかいモノがつぶれる感触<sup>かんじく</sup>がつたわる。たまらず、悲鳴を上げて牙を離し、のけぞるカミラ。そのカミラの顔に、レイは横殴りに拳をぶち込んだ。

頬の辺りの柔らかい肉のつぶれる感触。カミラの身体が4、5mほど飛ばされ地面に叩きつけられ地面に転がる。

その姿、手に残る感触に、レイの顔がうれしそうに歪<sup>ゆが</sup>む。

「立てよ。まだ終わりの訳が無いだろう？ まさか、不死の一族の力とはそんなものなのか？」

「がっ、あっ、ああっ」

カミラは立ち上がり、人間ではありえない角度に曲がった首を己の手で無理やりに元に戻す。カミラの口からは苦痛のうめきが漏れ、痛みの為か、味わった屈辱<sup>くつじやく</sup>の為か、身体が小刻みに震えている。

レイは、口元を押さえ、くっくっくと笑った。

「殺す。今度こそ、徹底的に完膚なきまで殺す」

カミラが再生した目でレイをにらみながら宣誓する。それに対し余裕の笑みで返すレイ。

「やってみろ」

レイの言葉が終わらないうちに、カミラの身体がすべるように動いた。

レイは目を見張った。先ほどとは打って変わった無駄の無い動きで、レイに近づき攻撃を加える。反撃しようにも、絶妙なタイミングで牽制の蹴りや拳が飛んでくる。

なぜだ？ 絶え間なく動き回り、身をひねり、攻撃を避けながら、疑問が頭を駆け巡るが、カミラの鋭い一撃に思考を中断させられる。自ら身体を後ろに倒し避けるが、避けきれず右手の肘から先を持っていかれる。

右肘を抑えて立ち上がるレイに、カミラがうれしそうに笑う。

「形勢逆転かしら？ なぜだか教えてあげてもいいわよ」

カミラは、右手についたレイの血液をおいしそうに舐めとった。

カミラ VS レイ（後書き）

今回の更新これで終了。

続きはまた来週の水曜日です。

カミラもレイも絶好調ですねえ。レイなんか秋穂のこと忘れている  
みたいなはしゃぎっぷりですよ。

秋穂どうしよう。

えーと、来週からタイトルが『吸血鬼狩り』になります（ウンです）

求めるもの

とくん…… とくん…… とくん、とくん。

うるさいなあ。

もう少し、寝かせてよ。

とくん、とくん。

何の音だろう？

途切れ途切れだったと音が、だんだんと一定のリズムを刻みだす  
うぐん。喉が渴いたなあ。

水？ 濃い目のブックコーヒー？ 気分的にはアイステイヤーが欲  
しいかな？

……血…… そうね、紅い、紅い血液…… 血、血、血、血、血、  
血、血、血、血、血…… ち、ちがう、ちがう、

飛び起きて、喉を抑える。

「血、血、血、血…… ち、ちがう、ちがう」  
額を地面に何度も叩きつける。

痛みで、思考力が少しだけ戻ってきた。

「行かないと……」

私はまだ力の入らない身体に鞭むちを入れて、よろよろと、立ち上が  
る。足元がふらつく。

「早く、行かないと」

でも、どこに？

私の中の何かが訴えるが、具体的に何をやらねばいいのか判らない。  
どこに行くの？

「あなたは、自分の能力に振り回されているのよ」  
「なんだと？」

会話の間にも俺は破壊された右手の再構築に全ての力をかたむける。

「あなたの身体の動きは、あなたが思っている以上に早い。その意識との差が隙を生む。さあ、いいかしら？ 右手も再生しようだしね」

俺は再生したばかりの右手を握ったり開いたりする。

「いいのか？ そんなことを教えて」

「頭でわかっても、修正がきくものじゃないからね。さあ、第2ラウンド開始」

カミラの右手の爪が、20センチ程伸びた。

「そんなこともできるのか？」

俺は変身と同じように、自分の爪が伸びるのをイメージした。確信してやったわけではなくなんとなくやってみたが、成功したようだ。

ちゃんと右手の爪が伸びた。その爪をコンクリートの壁に向かい一振りすると、コンクリートの壁がスパッと切断される。

「では、始めようか。カミラ」

どこに行ったの？

私の意識が何かを探す。でも何を探しているのか私自身わからない。

こつんと、足元にあった何かを蹴っ飛ばした。

棒状の細長い物。端のほうを持って拾い上げる。黒塗りの鞘が地面に転がり、銀色の刃が現われた。

日本刀…… 私の？ 見覚えがある気がする。

わからない……

上手く考えがまとまらない。でも、行かないといけないと、私の意志が命令する。

行く？ 行ってどうするの？ 止める？

どこに？ だれを？ 何を止めるの？

鞘を拾い、刀を納めると、抱きしめるようにして持つ。なんだか安心する。

それでも、私の心の声は治まらない。

でも、どこに行けばいいの？

思考がまとまらない私を、微かな血臭が混じった夜風が包み込んだ。

「あはは、血の臭い」

何故か、その鉄臭い生臭さに笑みが漏れる。

私は血臭に誘われるようにしてフラフラと歩きだす。

「血よ。血の臭い。美味しそうな血の臭い」

歩きながら、ぶつぶつとつぶやく。

『紅い血』。私の思考はそのキーワードに塗りつぶされた。

求めるもの（後書き）

なにやら、怖いことになっている（笑

どうも、この間からイメージカラーが『紅』になってしまっています。

そこで問題です。今回『血』という文字をいくつ使ったでしょう？

答えは22回です。意外と少ない（笑

前回の更新のように何話もというわけには行きませんが、今日中に1話、できたら2話更新したいですね。

## 銀髪金眼の少女

「くそつたれ」

アルセクトは悪態をつく。いつもより傷の再生が遅く感じる。主人クラスのヴァンパイアでは、レイやカミラのように失った四肢を、瞬時に再生するという芸当は出来ない。

「……」

月明かりをさえぎり、少女が金色の瞳で、アルセクトを覗き込んでいた。アルセクトの瞳が驚愕に開かれる。

バカな。気配どころか、足音一つしなかった。ヴァンパイアの感覚をもつてしても感知できなかったというのか。

「ハンターの葉月秋穂か？」

金色の瞳に腰まで届く銀髪、外見はだいぶ変わったが面影は残っている。輪廻転生を信じたくなるほど、自分の娘と瓜二つの少女。

少女はコクンと頷いたが、その瞳に感情の波は反映されていない。何も考えていないかのように無表情のまま、アルセクトを見つめている。

「ヴァンパイア化したのか？」

主人クラスのヴァンパイアではない。レイやカミラと同じだとすると、自然発生したヴァンパイア。

ピクン。少女の身体が振るえ。手にした刀をギュツと握り締める。そして、アルセクトの背筋を凍らすほどの邪悪な笑みを浮かべた。

「血の臭い。でも貴方じゃない…… あっちな。見つけた」

少女はアルセクトに背を向け歩き出した。

「ぐはっ」

強烈な蹴りを受けて、俺は瓦礫の中に倒れる。

両腕をもがれ、再生にすべてのエネルギーをまわすが、なかなか

再生しない。

血を流しすぎた。再生にエネルギーをまわそうにも、エネルギー自体が尽きかけている。だが、カミラもそれは同じだ、右肩から引きちぎられた腕は、まだ再生していない。

「ふん、ここまで苦戦するとはね。そろそろ貴方を倒して、エネルギー補給しないとね」

ゆっくりと近づいてくるカミラ。

秋穂、ごめんな。俺もここまでらしい…… 約束…… 守れなかったな。

もう一人、弓道着を着た少女の姿が脳裏に浮ぶ。

美月…… 君が救ってくれた命だが、もういいよな？ 何の当てもなく、復讐だけを目的に生き続けるのも疲れた……

目も前までカミラが来て、歩みを止めた。

「何か、言い残す事はあるかしら？」

「やれよ。偽善者ぶるのは似合わないぜ。お・ば・さ・ん！」

カミラが憤慨ふんがいしてなにか喚くが、俺は聞いていなかった。静かに目を閉じる。

死ぬのは、いや、元々滅びるべきなのは、俺だったのだろう。秋穂や美月を巻き込んでしまったのが悔いといえる。

「この、覚悟なさいよ」

カミラの声。俺は、死神の鎌が振り下ろされるのを待つ。

だが、いつまでたっても、死神の鎌は振り下ろされない。代わりに暖かい液体が顔にかかる。そして、生臭い鉄の臭い。

目を開いた俺に飛び込んできたのは、上半身と下半身に両断されたカミラの姿と、返り血を頭から被り壮絶な笑みを浮かべた。金眼、銀髪の少女の姿だった。

「あはっ、あははははは、そうよ、この臭い。この血の臭い」

カミラの下半身が、灰となり崩れ落ちる。

「あ、秋穂なのか……」

俺の呟きは少女に無視される。少女は、上半身だけになったカミ

ラの上に乗ると、笑みを浮かべたまま言った。  
「私、喉が渴いているの。もう我慢できない。貴女の血、いいえ、  
命をもらうわよ」

その声は、喜びに満ち溢れていた。

銀髪金眼の少女（後書き）

秋穂の乱入であのかみらが、ずんばらりと真っ二つ（笑  
いや笑い事でないし、最後にとんでもないこと口走ってるし。  
というわけで、今夜にでも続きを更新します。

血と暴虐の歌（カンツォーネ）

私は上半身だけになったカミラの腹の上にまたがった。

抵抗しようとする左手が邪魔だ。日本刀を突き立てて地面に縫いとめる。

「ブ、ブラド様、眷属たる私をお助けください」

「ブラドだと」

レイが、カミラが叫んだ名前に驚きの声をあげるが、私の関心は他のことに向いていた。

両拳を固めると、高々と振り上げカミラの胸に振り下ろす。

「やつ、がは、ごっ、がっ！！」

拳を振り下ろすたびに、カミラが獣のごとき悲鳴を上げ暴れる。

その拍子に縫いとめられていた左肘から先が切り落とされ灰になって崩れ去った。

抵抗する術を失ったカミラの苦悶の悲鳴と、湿った肉を叩き潰す

音、両手に伝わる肋骨を砕く感触に、頬が緩む。

「秋穂！ やめてくれ！ もう、やめてくれ……」

レイの叫びも私の耳には届かない。そして、頭上に形作られる人影にも、気がつかなかった。

ただ、カミラの漏らす悲鳴と、両の腕に伝わってくる感触に酔いしれる。

もう一度拳を振り下ろすと、カミラの皮膚を突き破り白い肋骨が顔を出した。その破れ目からどす黒い血液が湧き出す。

「た、助けて…ブラド…様…いや、死にたくない…た、すけ…がはっ」

突き出した肋骨を掴み、引き剥くとその辺に放り投げる。放り投げられた肋骨は、地面に落ちると音も立てずに灰となる。

あはっ、カミラが何故、人間をいたぶり殺すか理解できた。この

性的快感すら伴う感覚は、癖になる。

「もつと、声をあげてよ。うふふ、絶望の悲鳴を聞かせて……ね？」

私の言葉にカミラが絶望の表情を浮かべる。今の私にはそれがうれしくてたまらない。

私はもう一本、肋骨をゆっくりと引き抜く。

「がっ、くはっ、ブラド様、ブラド様」

カミラが私の頭上を見上げながら懇願する。その表情すら私に快感をもたらす。

「うふふ、濡れちゃいそうよ、カミラ」

カミラの苦悶の表情が、その悲鳴が、私の身体を熱くさせる。

「ブラド様、ブラド様、がはっ、がふっ」

カミラの胸に開いた孔に指を突っ込み、力いっぱい左右に押し開く。

瞬間、カミラの絶叫が辺りに響き渡る。胸を左右に裂き開かれ、内臓を露出しながらも強靱な生命力を誇るヴァンパイアは死なないいや、死ぬことを許されない。ただ苦悶の悲鳴を上げ続ける。

「カミラ、よくやった」

頭上から声が掛かる。首だけ声の方向に向けると、30代ぐらいの男が中に浮いている。やや細身の銀髪金眼の男。整った容姿もどこか貴族的な上品さが伝わってくる。

「ブ、ブラド様、お助けください。があっ！」

私は頭上に現われた男を無視して作業に戻る。頭上の男のことも、カミラをいたぶることも今の私には重要だから。

そして見つけた。暗褐色の力強い鼓動を刻む臓器。その紅い宝石を見て口の中に湧き出した唾液を飲み込み、口の端をなめる。

その私の仕草を見たカミラが、頭上の男に助けを求めぬ。

「ブラド様！」

涙と苦悶の表情で顔をくしゃくしゃにしたカミラ。少し前に、余裕の表情を浮かべ、私たちを見下していた美女はもうそこにはいな

かった。

死の恐怖におびえ、絶望を突きつけられた女の姿がそこにある。

「黄金律の血肉を持つヴァンパイアの覚醒。我が幾千年待ち続けた瞬間、お前やその若造のような紛い物の真祖ではなく。真に私と同族たる者の覚醒。カミラ、お前は最初の糧となるのだ。覚醒のため、糧に」

「そんな…いい、嫌…助けて、おねがい、助けて」

カミラの哀願の表情、それすら今の私には快感でしかない。私はカミラの心臓を崩さぬようにすくい上げ、繋がっている血管を切り離した。

「そ、そんな。ブラ…ど……」

カミラの動きが止まり、サラサラと崩れはじめた。完全に灰と化して崩れ去ったカミラの心臓を掲げる。両腕を伝い、紅い血が滴り落ちる。

そして、まだ脈打つその心臓を、ゆっくりと口元に近づけた。

血と暴虐の歌（カンツォーネ）（後書き）

秋穂が怖いです……

ちなみにカミラはまだ生きてます。心臓を破壊されない限りとりあえずは再生可能（一度灰になります）です。

では本日の更新はここで終了です。ただ来週の更新は火曜日になります。

## 抵抗

「や、やめる！ 秋穂！」

カミラの心臓を口元に近づける秋穂に向かい、俺は叫んでいた。つぎの瞬間、腹部に衝撃が走る。

「黙って見ている！」

「がはっ」

ブラドが俺の腹部に足を乗せ、体重をかける。

「さあ、飲め、喰らえ、そうすれば永遠の命はお前のものだ！」

だが、秋穂の動きは、目の前に心臓を掲げた姿勢で止まっている。「どうした。飲みたいだろう。喰らいつきたいだろう。それでいいのだ。さあ、舐めてみる」

「秋穂！ があ」

再度、腹部に走る衝撃。

「黙っているとやっている。それとも、このまま滅びたいのか」再生したばかりの両腕で、ブラドの足を持ち上げようとするが、びくともしない。

秋穂の両腕が震える。そして…… 両手にある心臓を握り潰した。小さな心臓に詰まっていたとは思えないほどの血液が飛び散り、真紅に秋穂の姿を染める。

「ふ、ふざけないで…… あ、貴方たちみ、みたいに…… ひ、人の命を弄ぶ……よ……な……達の……思い通りに……らない」

秋穂がブラドを睨み付け、突き立ててあった刀を杖代わりに立ち上がる。肩で息をして苦しそうな表情が浮んでいる。

「ほう、あの状態から、人としての理性を取り戻したか。たいしたものだ、苦しかろう？ 血を飲めば楽になるぞ。幸い予備もひとつある」

ブラドが俺を蔑むような目で見る。

しかし秋穂は、俺を見ると何かを決心した透明な笑みを浮かべた。

私の中には血を欲する衝動が渦巻いている。少しでも気を緩めれば、ためらいなくレイを襲い、その心臓を取り出すだろう。

意識に霧がかかったみたいで、はっきりしないが大丈夫、まだ自分自身の意思で動いている。

「ほう、あの状態から、人としての理性を取り戻したか。たいしたものだが、苦しかろう？ 血を飲めば楽になるぞ。幸い予備もひとつある」

レイを蔑むような目で見るブラドの言葉を否定する一方で、認めてしまえ。私はもう吸血鬼なんだ。という声が心を揺らす。けれど、私はレイに笑みを向けた。

刀の刀身を握り、切っ先を自分の胸に向ける。私は一度死んでいる、それが二度になりだけの話。罪の無い人の命を奪ってまで生き延びようとは思わない。

ごめん！ レイ！

「や、やめろ！」

レイの叫びとともに、両腕に衝撃が走り、刀が地面に転がる。ブラドの蹴りが刀を叩き落したのだ。

湧き上がる、怒りと攻撃衝動。

まずい！ もう見境なくなってきた。自分でも、いつまで抑えられるのかわからない。私は攻撃衝動を押さえつけるように、自分自身の身体をギュッと抱きしめる。

「勝手にリタイヤしてもらっては困るな。私とて何千年と捜し求めてきたのだ」

「考えは…… 変わらないわよ」

精一杯の強がり。今にも意識が跳びそうだ。

「我々は、いや、原種と呼ばれるヴァンパイアからは昼間でも活動できる。人間と変わらない生活ができる。何が気に食わない？ 血

への欲求も最初だけだ、一度飲んでしまえば、後は血液なしでも生きていける。いや、死ねないというべきか」

くう、また血への渴望が湧き上がってくる。抱きしめた自分の腕に指をめり込ませる。強化服に穴があき破れた皮膚から血が滴り落ちる。痛みで、その欲求を押さえ込む。その私の行動を、ブラドが興味深げに見つめる。

「くっ…… ハアハア」

「永遠の若さを、欲しいとは思わないか？ 何者をも凌駕する力は？ 能力は？ それがあれば、思い通りに生きていけるぞ」

確かに魅力的な考えなのだろう。法とは無縁の所でその力だけを頼りに生きていく。でもその先に待つものは永遠の孤独。

「でも、その生き方をする貴方の瞳は、何故、寂しいの？ ……どうして、自分と同じ仲間を求めなの？ そんな孤独と引き換えの強さなんていらない」

ブラドは私の問いに答えない。その代わりにその瞳が揺らぐ。

「私が欲しいのは、私が好きな人たちが私の周りにいてくれること。そのうちに愛する人ができて、その人の子を育み、子や孫に囲まれて…… 逝く…… そんな当たり前の小さな幸せ」

そうなのだ。私が本当に欲しいのは、そんなちっぽけなもの……ちっぽけだけど、それを得るのは難しい。でも、それを得るのに、大きすぎる力もいらぬ。

ハンターであることも、大事なことはない。そのちっぽけな幸せの邪魔になるなら、ハンターの地位、力など手放してもいい。その程度のものなのだ。

地面の上をすべるようにして近づいてきたブラドの手が、私の首筋に触れた。

「娘、半年の猶予をやるう。その間よく考えるのだな」

私の腰まで伸びた銀髪が抜け、元の黒髪のショートカットに戻る。おそらく瞳の色も元に戻っているだろう。身体から力が抜け、立っていることも出来ない。

「ヴァンパイアウイルスは、休眠させておいてやる。精神的に壊れても困るのでな」  
血を欲する欲求、他者への攻撃欲求が引いていくと共に、私の意識も闇に包まれた。

抵抗（後書き）

心臓を破壊されたので、カミラが消滅しました。

（-人-）ナムナム

さて来週で、この金髪のヴァンパイア編（カミラのことですね）も終了となります。

第3話はサイドストーリー的なものになるので、本編は第4話に続きます。

## 事件の終わり そして始まり

銃弾を受けたヴァンパイアが、ドロドロに溶ける。

「見た目は最悪だけど、威力は充分ね」

月島舞奈は助手に指示を出すと、溶けたヴァンパイアを回収させる。

「よう、景気はどうだい月島さん」

ヨレヨレのスーツを着た中年が立っていた。よく知っている顔だ。

「田坂さん。ええ、この新型の弾丸のおかげで楽できています」

「お嬢ちゃんは？」

お嬢ちゃんというのは、舞奈がハンターになるための技術を叩き込んだ少女のことだ。たて続けにヴァンパイアを仕留めた事で、今年デビューの新人ハンターの割には知名度が高い。

先日のヴァンパイアによる連続殺人事件において、犯人のヴァンパイアを倒すも、意識不明の状態で見送された。医者の話では目立った外傷もないとのこと。意識が戻るのを待つしか方法がないらしい。

ちなみに一緒に発見された助手の少年も、起きたことを報告した後に意識を失い、いまだに目覚めていない。

「相変わらずよ。もう4日経つのに……」

「そうか、ウチの連中もお嬢ちゃんに礼を言いたいとさ」

そう言っただけで田坂さんが苦笑いを浮かべる。まあ、舞奈の担当官たちも同じだ。彼らは直接彼女に助けられているから他の担当官達よりその気持ちは強いだろう。

「たく、いつまで寝ているつもりだ、あのふたりは？」

「そういいながら田坂さんの表情は穏やかだ。」

「しょうがないですね。眼がさめたら私の所にも連絡が来ますし、朝になったら病院に行ってください」

舞奈は田坂にそう言っくと、少しだけ悲しげな笑みを向けた。

若い女性が闇の中を逃げている。時折、後ろを振り返るは追っ手が近くまで迫っているのを感じているせいだろう。

逃げる女性の腕を誰かが掴んだ、細い女性の手だ。追っ手は女性の腕を自分の方に引き寄せる。女性の恐怖に潤んだ瞳に写るのは……がばつと、かけてあったシーツを跳ね除けて上半身を起こした。小刻みに震える身体を押さえつけようと自分で自分の身体を抱きしめる。がたがたと歯の根が合わない。

夢だ、夢だ、現実じゃない。自分に言い聞かせてどうにか心を落ち着ける。恐怖に潤んだ女性の瞳に写った銀髪に金色の瞳をした自分の顔……

あのとときの出来事は全部覚えていた。狂おしいまでの血への渴望、破壊衝動。カミラの心臓を取り出すときの感触と高揚感。

「はあ、はあ」

しばらくすると呼吸も落ち着き、タップを刻んでいた心臓が大人しくなる。

少し落ち着くと周りを見回す余裕が出てきた。薄暗い中浮かび上がる白い壁に天井、病院だろう。

「骨折、直ったばかりなのに」

前回の事件で骨折してからそれほど時はたっていない。事件のたびに病院の世話になるとは情けない。

そんなことを考えている私を、突然、懐中電灯の光が照らし出す。

「葉月さん？」

女性の誰何すいかの声。

「あ、はい」

「ちよつとそのまま待っていて！」

返事すると女性があわただしく出て行った。医者でも呼びに行つたのだろう。

私はため息をつく、ベッドに倒れ込む。多分、どこも悪い所などない。私は確信していた。

ベッドに横たわるのは、美少年と表してもいい容姿をしている。その部屋に、そっとドアを開けて侵入すると様子を伺う。誰もいないようだ。

私は死んだように眠る。レイの横に立つと隠し持ってきた果物ナイフで左手の指先を浅く切った。

血液が盛り上がるのを待って、紅い雫をレイの口の中に落とす。次の瞬間、カッと目を見開いてレイが私の指にむしゃぶりつく。

私はしばらくレイの好きにさせていたが、キリがなさそうだ。

「さつさと、目を覚ませー！」

頭に拳を振り下ろすと、レイが眼をぱちくりとさせる。

「あ、秋穂」

「レイ、記憶はしっかりしている？ 覚えている？」

矢継ぎ早の質問にレイは、コクコクと頷く。

「それじゃあ、聞かせて頂戴。レイの知っている事を全部」

「はあ……」

リーフのいつもの席で、オリジナルブレンドコーヒーとシナモントーストを前にため息をつく。

病院は精密検査を受けた後、異常無しという事で、目が覚めて2日後には退院の許可がでた。レイも同様だ。

まあ、何故か異常に多かった見舞い客の大軍から解放されただけでもよしとしよう。実際、入院している間のほうが忙しかった。

考えても仕方が無いので、ぬるくなったコーヒーに手をつける。

「秋ちゃん、どうかしたの？」

この店の店員にして、店長の奥さんの秋保さんが訊ねてきた。秋保さんも私が立て続けに入院となったので心配してくれているみたいだ。退院した日に、レイと顔を出した時には大層、喜んでくれた。「なんでもないです。ただ、田坂さんからの呼び出しなもので何かなあ……なんて」

嘘だ。実際にはブラドのことが何もわからないことが原因だ。レイも、ブラドのことは何もつかめていないに等しかった。分かっていることはブラドがカメラを使い私のような黄金律の身体を持つものを探していたことぐらいだ。

始祖のヴァンパイア、ブラド「ツエペシユ。ブラムストーリーカーの小説『ドラキュラ』のモデルになった実在した人物。

この間の人物が、そのブラドと同一人物なのかどうかは不明だが、彼が私のこの先の運命に大きな影響を与えるのは間違いない。

「そうなの？ あんまり思いつめないでよ」

そう言って、シナモントーストの載った皿をひょいと取り上げる。

「今、新しいのを出すわね」

「あ、でも」

「遠慮しないの！」

「あ、ありがとう」

いつもと違う迫力に口をついて出たのは、感謝の言葉だった。私がついた嘘にも気が付いているのだろう。ごめんなさい、すべて終つてからでないと話せないの。心の中で秋保さんの背中に両手を合わせた。

「よう、嬢ちゃん。早いな」

背後に田坂さんが立っていた。

「田坂さん。30分遅刻です」

「悪かった。秋保さんブレンド」

田坂さんは、悪びれた様子も無くオーダーを入れたりしている。

「今日は、なんですか？」

「つれねえな。報酬はがっぽり入っただろう？」

タバコに火をつけながら、そんな事を言う田坂さん。

「予定外のヴァンパイアとワーウルフの分はもらったけど、ヴァンパイア・カミラの分は最初の契約の通りだしね。ハッキリ言って赤字よ」

そう言つて、プリントアウトしておいた収益表を田坂さんに見せる。

「うっ」

その収益表を見て田坂さんが絶句する。

「その他のモンスターの分を足して、どうにか黒字。……田坂さん？ どうしたの？」

田坂さんはテーブルに置かれた水を手に取りあおる。

「こんなに高いのか？」

「今回は特別だけだね。ハンタースーツも壊れちゃったし、P90を4丁に、認可前の特別製の弾丸。弾丸については、先日認可が下りたから次回からは、半額くらいになると思う。ハンターが高給取りだといわれても、装備等に半分は消える」

「……」

ちよつと脅かしすぎたみたいね。

「ハンタースーツとP90本体の金額は、差し引いても良いわよ。スーツ壊したのは私のミス。P90は私が勝手に取り寄せたのだし、そのくらいの価値はあったと思う。田坂さんも佐藤さんも、怪我一つしなかつたでしょ」

「面目ねえ」

私も秋保さんにブレンドのお代わりをお願いします。

「田坂さんを、責める為に持ち出したわけではないわよ。もしかしてはじめて見た？」

「今までは、人間相手の事件を担当していたし、ハンターと組むのは2度目だ。それにハンター連中は秘密主義が多くてな」

警察のトップの考えにはあきれた。担当官の命を何だと思つているのかしら。田坂さんも佐藤さんも、モンスターに関しては本当に

素人じゃない。

「プライド高いから、契約金額より経費が掛かりました。なんて、口が裂けても言わないわ。だから、現場に同行したがる担当官を嫌がる人が多いのよ。今回のように入れても銀の弾丸やナイフを捜査官に渡す人なんてほとんどいない。舞奈さんでも担当官に銀の弾丸を売っていたし…… 付いてくるのは構わないが、自分の身は自分で守れという事ね」

秋保さんが田坂さんと私のコーヒーを運んできた。

「むむむ」

「大丈夫よ。今回の事件のような事は稀だし、ワーウルフより上はきついけど、通常のモンスターなら普通の拳銃弾で通じるから、後は運じゃないかな」

田坂さんは考え込んでしまった。だが、これが現実だ。今回の事件でも担当官の全員が銀の弾丸、もしくは威力のある大口径の銃火器を持っていれば、犠牲者はもっと少なくてすんだはずだ。

「そんな話を聞いたら、言い出しづらいのだが、これを見てくれ」

田坂さんが出したのはA4サイズの紙を何枚か束ねたものだ。表題には契約書とある。

「担当官は、俺と佐藤になる。1年目のハンターと契約するなんて前代未聞らしいのだが、推薦者が多くてな、生き残った担当官達とかハンター達だ。もちろん断ってもいい」

警察との本契約書。

私は契約内容を読むと、無言で署名捺印して田坂さんに返す。

「いいのか？」

「田坂さん、そのつもりだったでしょ。それとも契約しないほうがよかったかしら」

私は当然のように答えた。

「いや、そんなことはないが…… すまん、感謝する。ハンター葉月秋穂」

田坂さんに、名前で呼ばせてやると思ったこともあるけど、実際

に呼ばれてみるとなんだかくすぐつたい。

「そんな、あらたまらなくても、これからもよろしく、田坂さん」  
私が出した右手を田坂さんが握り返した。

まだまだ問題は山積みではあるけど、どうにかかなりそんな気がしてきた。

事件の終わり そして始まり（後書き）

おかげさまで第2話終了です。今回はいつもの倍のボリューム（4000文字弱）でお送りしました（笑）

最後まで読んでくれた人たちに感謝です。

そして評価感想を下さった方、誤字等の報告を下さった方には、さらに心からの感謝を。

さて第3話ですが、他の連載と放置状態の短編との兼ね合いもありますので、更新を始めるのが5月からになりそうです。

物語の時間軸はこの第2話の後になりますが、ブラドとか関係ありません。

一応3つの物語。

『リーフ』の物語

『斬<sup>ざん</sup>』の店長の物語

『舞奈と秋穂』の師弟の物語

を予定しています。

それにしても秋穂たちの世界にもあったんだねえ。ブラムストーリーカ

ー（笑）

では、次回のお話も、よろしく願いします。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7926c/>

---

ヴァンパイアハンター日誌 金髪のヴァンパイア

2009年7月1日21時22分発行